



* 0057754000 *

0057754-000

特 222-95

写真空の少年兵

古橋才次郎・解説

東亜書林

2版

昭和17

AJG

海軍省推薦



海軍中佐 古橋文次郎 藝術映画社

寫眞・空の少年兵

—海軍省推薦—

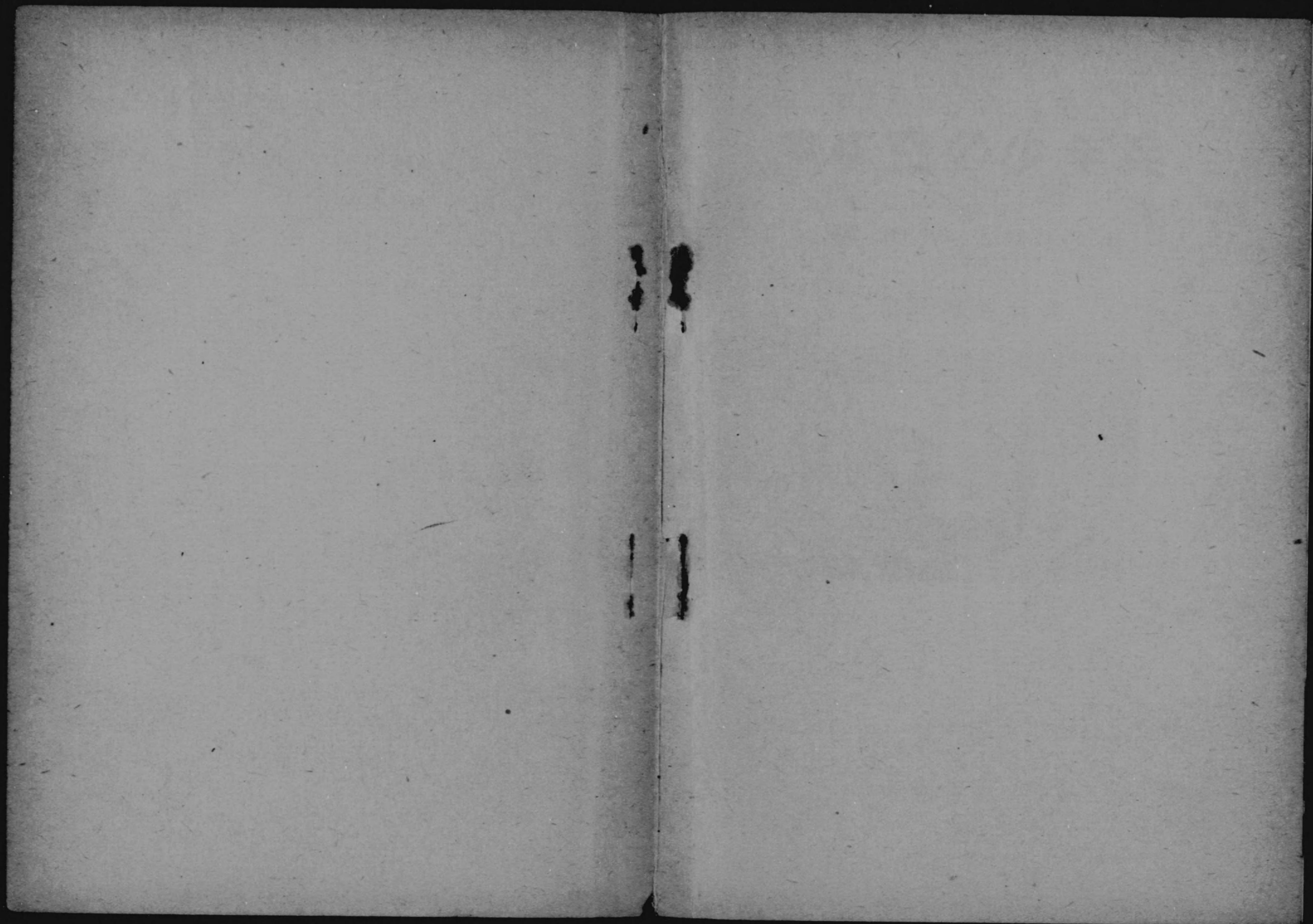


解説 —

海軍中佐 古橋文次郎 藝術映画社 編

493





特 222
95

寫真・空の少年兵

解説 海軍中佐 古橋才次郎

藝術映畫社編



東亞書林刊



燦たり海鷲の大戦果 (大東亞戰)



ハワイ
真珠灣攻撃
昭和十六年
十二月八日未明

斷乎命令を發する
〇〇艦司令

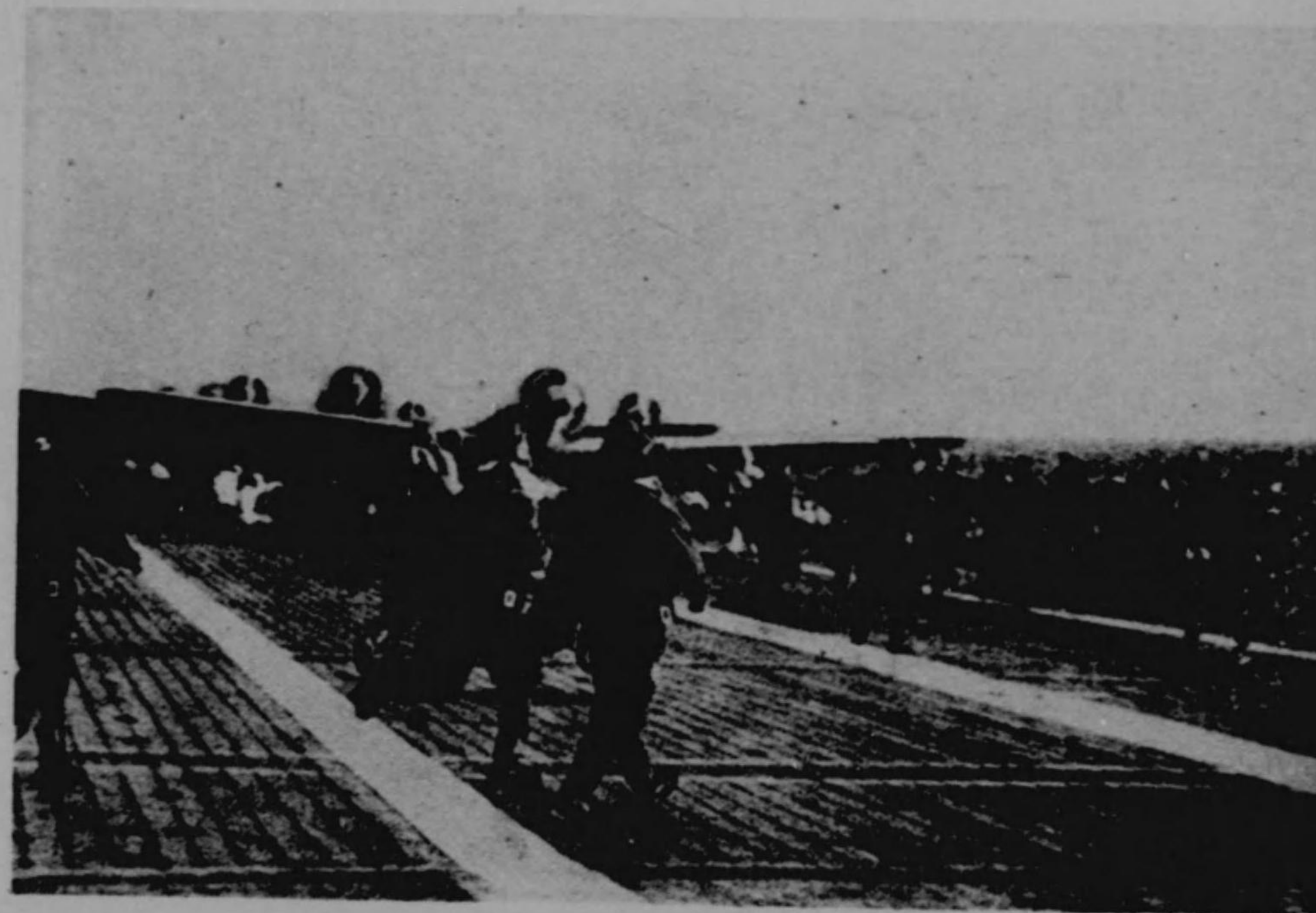
寫 眞

海 軍 省 檢 閲 済

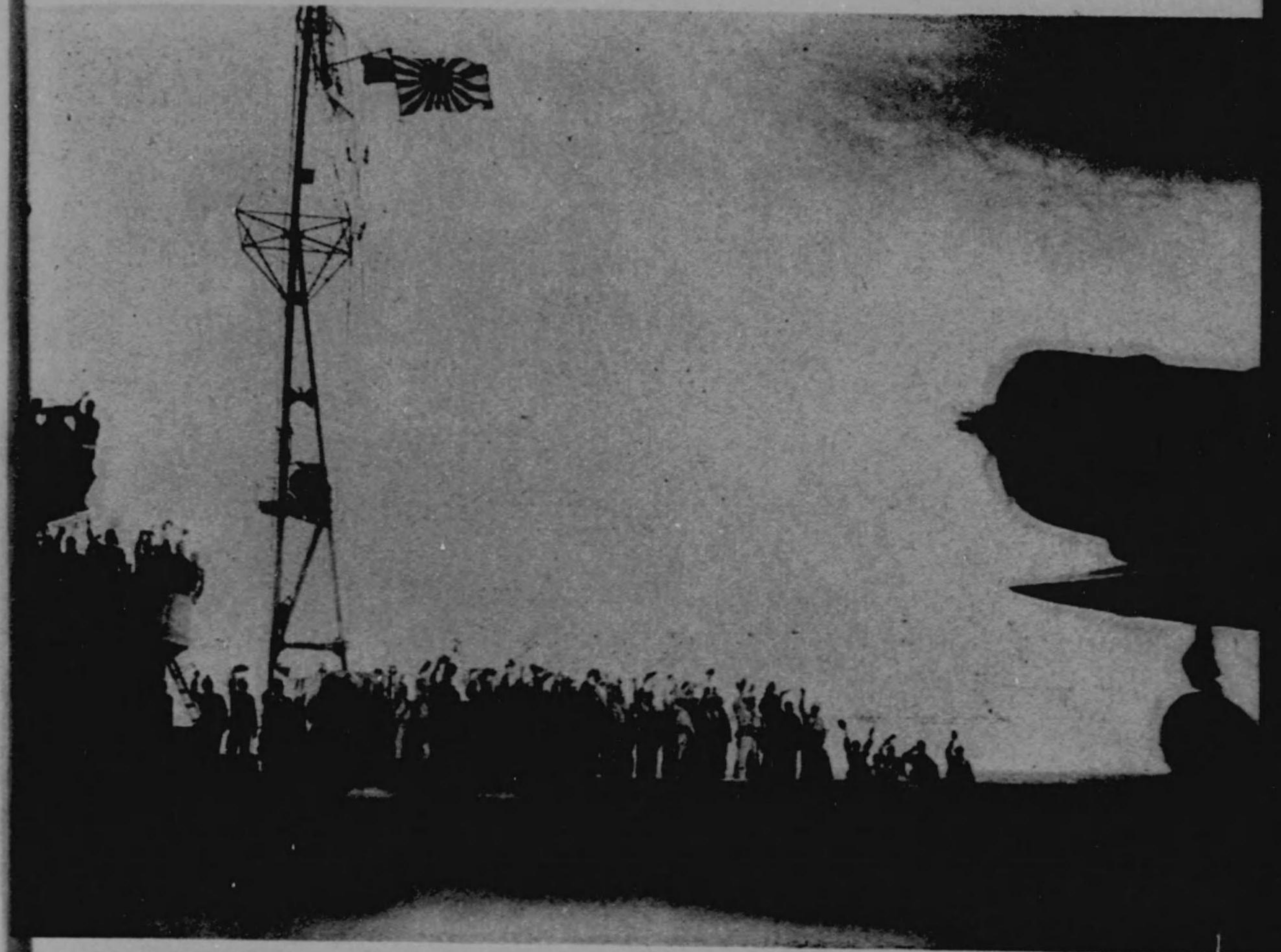
昭 和 十 六 年 十 二 月 十 六 日

命令は下つた。
さあ行くぞ。
勇士達の胸は鳴
る血汐はおどる
二十年間の訓練
の過去は今日一
日で決るのだ。

〇〇艦上



海軍省許可済 (第五七一號)



ハワイ大奇襲の壯途に就
かんとす。
爆音高く曉闇を衝いて將
に出發せんとする僚機に
決別する〇〇艦上。

一機また一機母艦より必
敵撃滅に飛立つ我が海鷲。

海軍省許可済（第五七一號）



ハワイ海戦

ハワイ真珠湾軍港，フォード島
周辺に葬り去られんとしつゝあ
る敵艦船及び軍事施設。



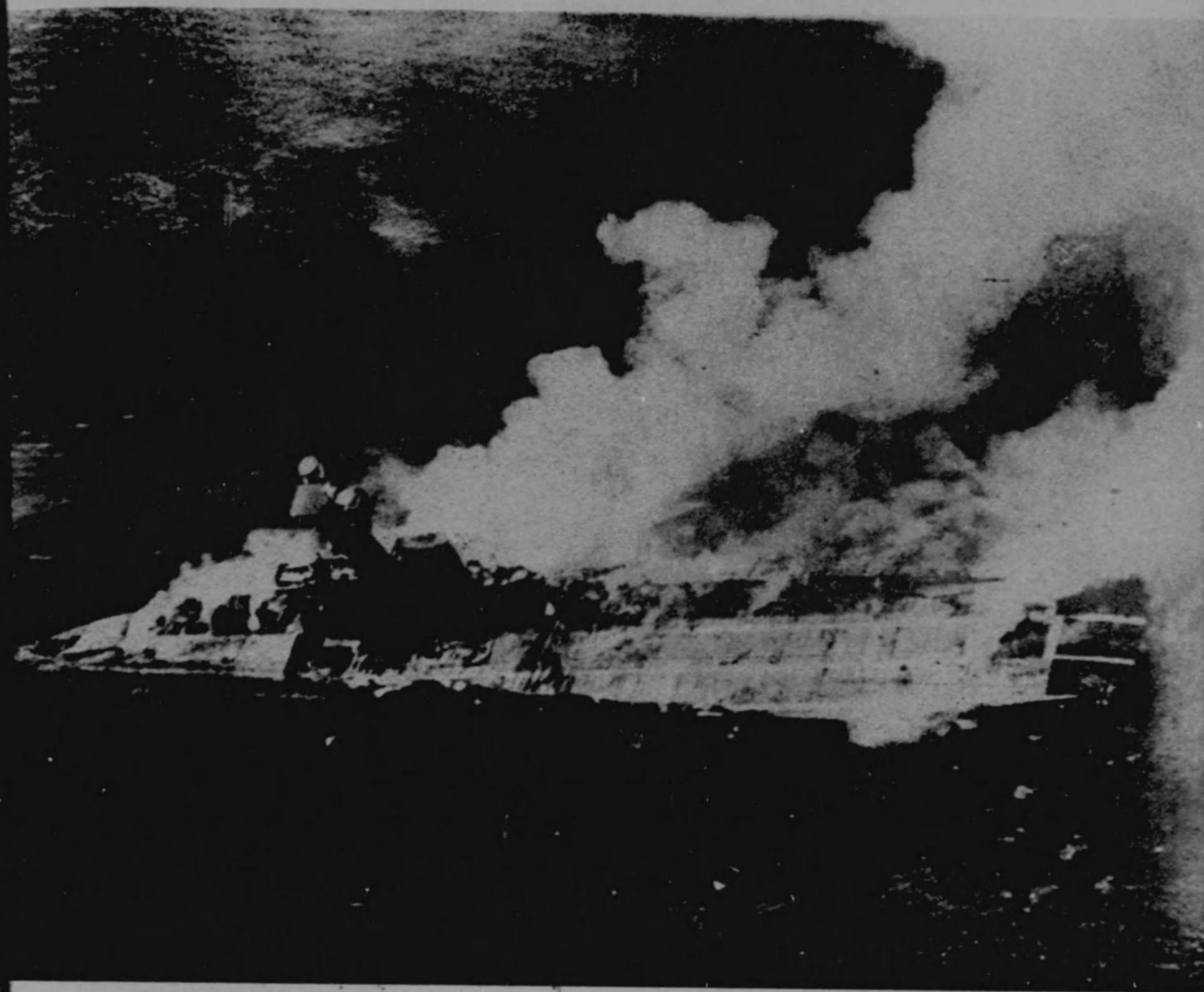
ハワイ海戦

わが必殺の猛爆下に惨憺た
る米太平洋艦隊の主力。



マレー沖海戦

十二月十日十二時四十五分頃マレー沖海戦における、海鷲の猛爆下に逃げまどぶ英東洋艦隊。上がレバルス、下がプリンス・オブ・ウェールズ。



英國航空母艦ハーミスの最後

命中弾により艦内に大爆発を起し
隨所に大火災を生じて將に沈没せ
んとす。

昭和十七年四月九日

海軍省許可済(第五七一號)



珊瑚海海戦

わが海鷲の攻撃に全速力を以て遁
走しつゝある米英聯合艦隊。
中央が米航空母艦ヨークタウン。
昭和十七年五月七一八日

海軍省許可済（第五七一號）



珊瑚海海戦

海軍省許可済(第五七一號)

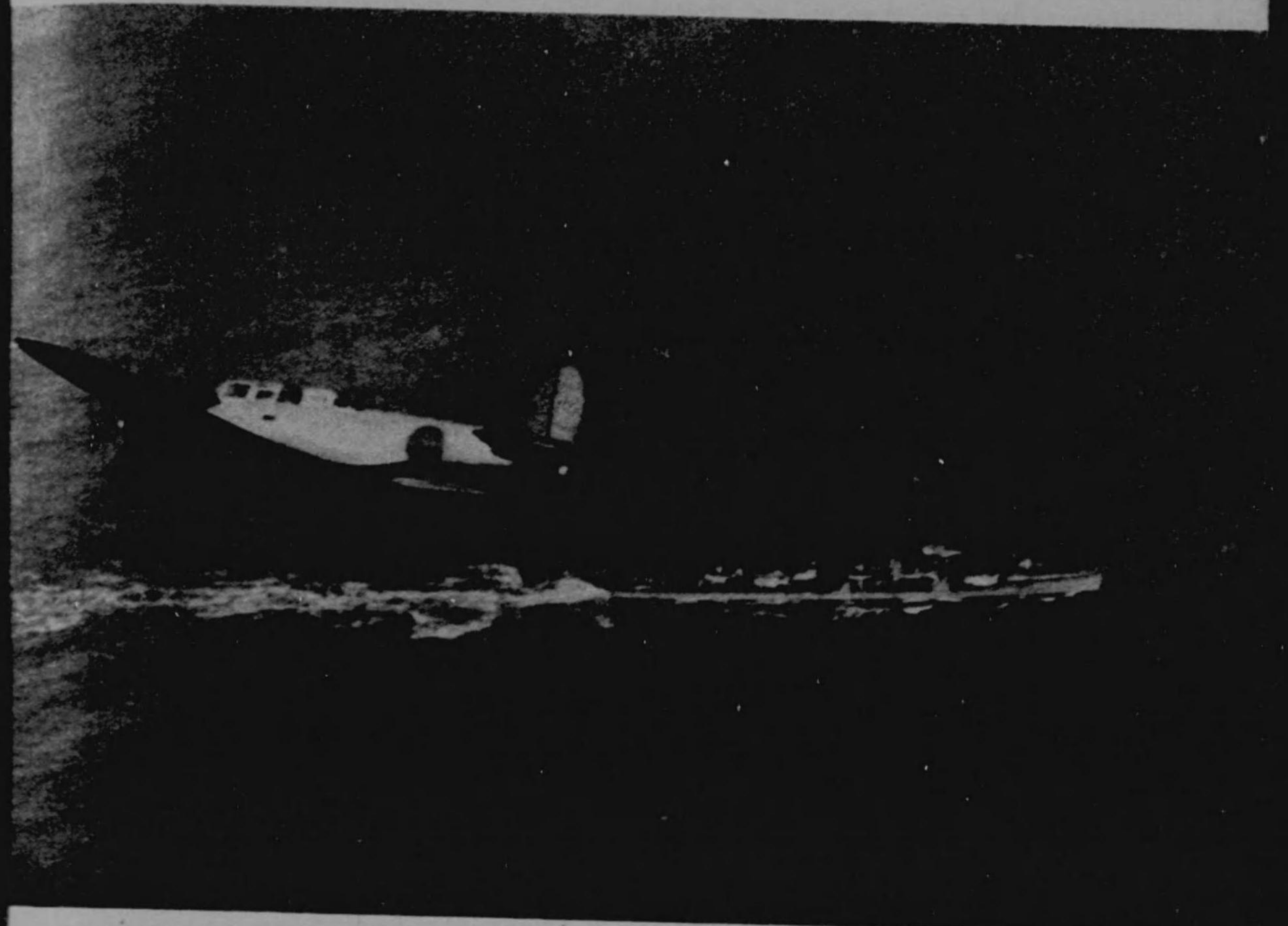
中央にあがる白煙は敵艦がわが猛攻により大爆発を起して沈没した直後の光景。前方に見えるのが敵駆逐艦で、上空に炸裂するのは敵の猛烈な防禦砲火。



珊瑚海海戦

大火災を起して海底に沈まんとしつつある米航空母艦サラトガ。

海軍省許可済（第五七一號）



海軍省許可済（第五七一號）

印度洋上海空協力索敵
に活躍する海軍部隊。

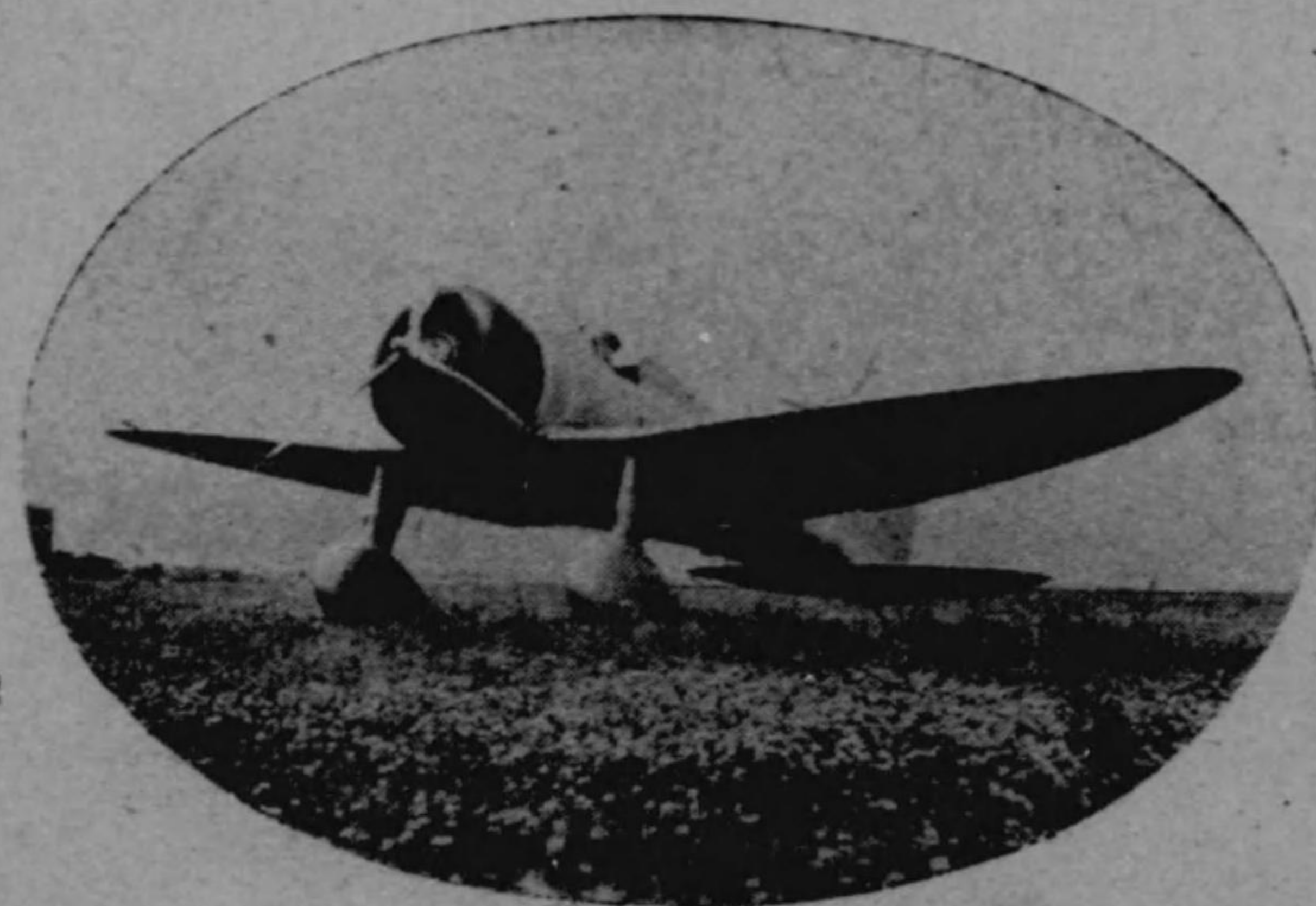
目次

地上鍛錬篇

記事 写真

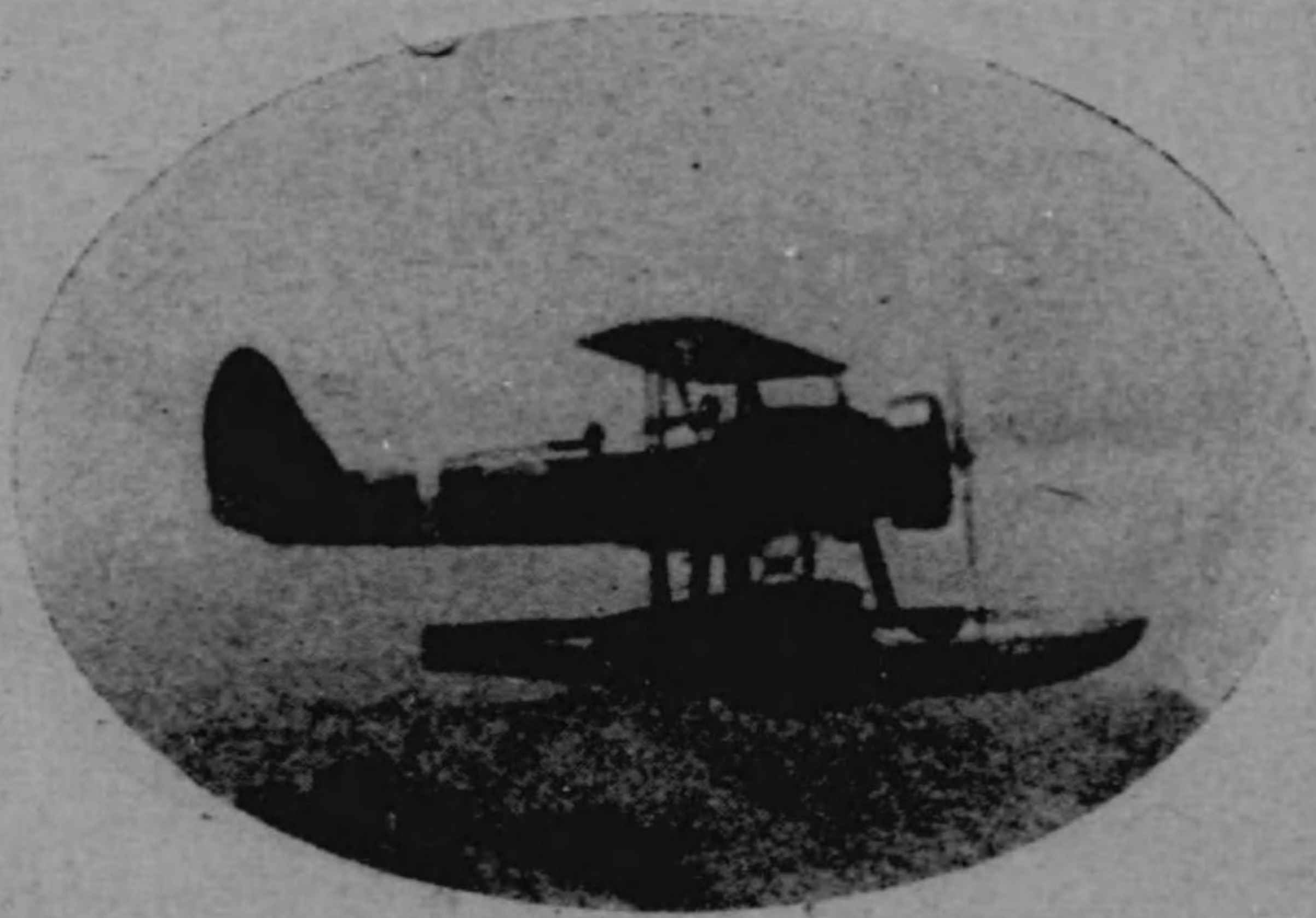
「空の少年兵」とは	9
入隊試験	10
試験場風景	10
父兄に挨拶する副長	11
口頭試問	12 13
操縦動作検査	14
視野測定	15
水銀保留	16
近点距離検査	16
音叉	17
顛倒反應	17
廻轉震盪	18
眼球振盪	19
入隊第一日	20
嬉しいおもはゆい様な ひと時	20 21
ハンモック	22 23
明治天皇御製奉唱	24 25

戦闘機



海軍省検閲済乙第1960號

先づ立派な海軍軍人に	朝の體操	26
	教室風景	27
	英數歴史	28
	通化學信	28
	手旗	29
	陸戰	30
	陸戰	31
	食卓番	32
	食卓	33
	短艇	34
	短艇	35
	帆走教練	36
	帆走	37
	運動の種々	38
	相撲	39
	武技	40
	銃劍術	41
	整備作業と艦務實習	42
	整備教務	43
		44
		45
		46
		47
		48



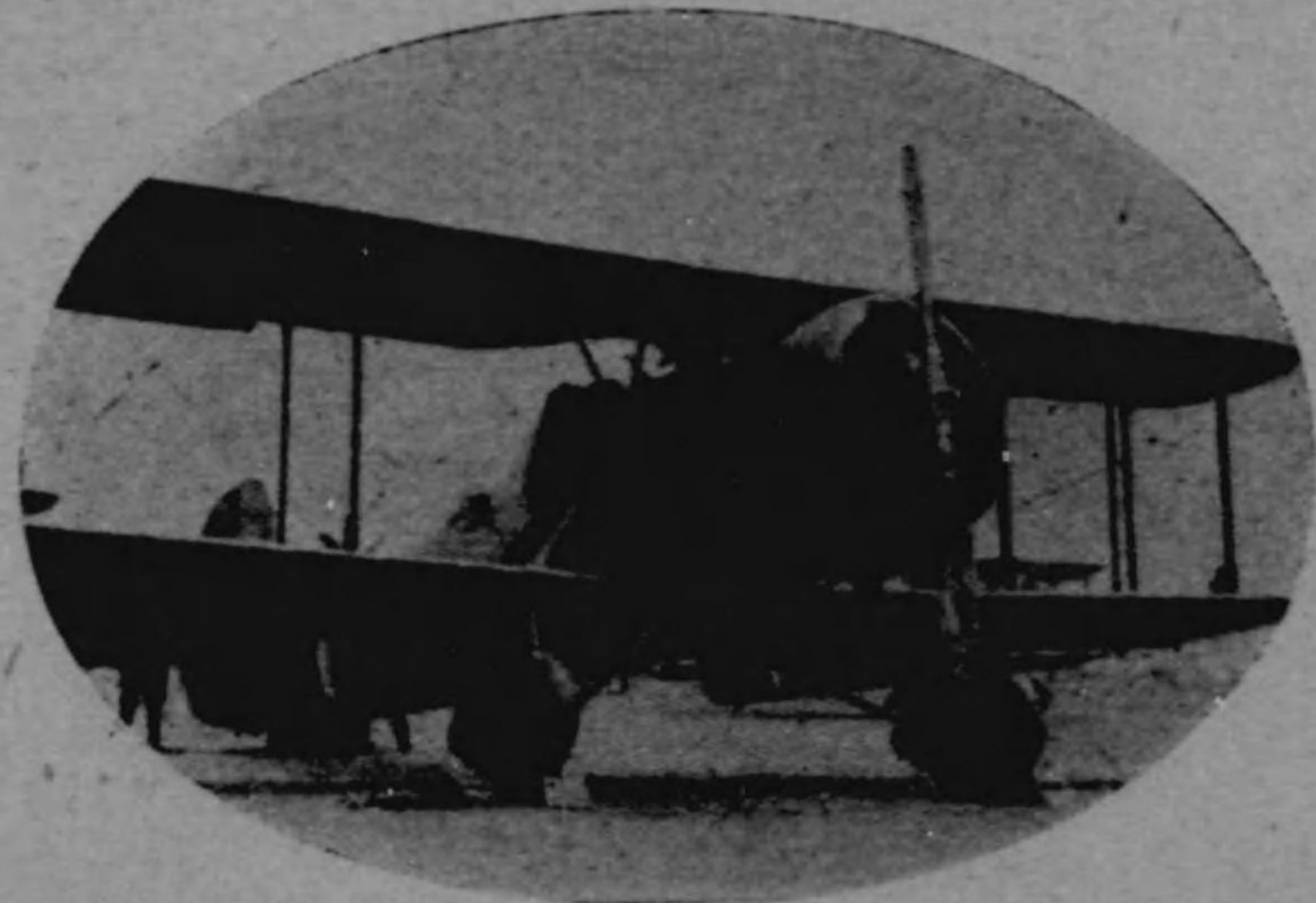
水上偵察機

海軍省檢閱濟
乙第 1961 號

俱樂部	試運轉	49
	日曜の俱樂部	50
	面會	51
地上練習機	地上練習機	52
	さらば飛行像科	53
	練習部よ	54
卒業		55
		56
		57
		58

雄飛篇

記事	寫眞	
あこがれの天空へ	航空隊の朝	60 61
	塔乗割當が發表	62
	同乗飛行	63
	傳聲管	64
	操縦教育	65
	見上げる親鷲と	66
	戦友たち	68
	あこがれの	
	單獨飛行	69
	報告を聴く地上指揮官	70
	報告	71

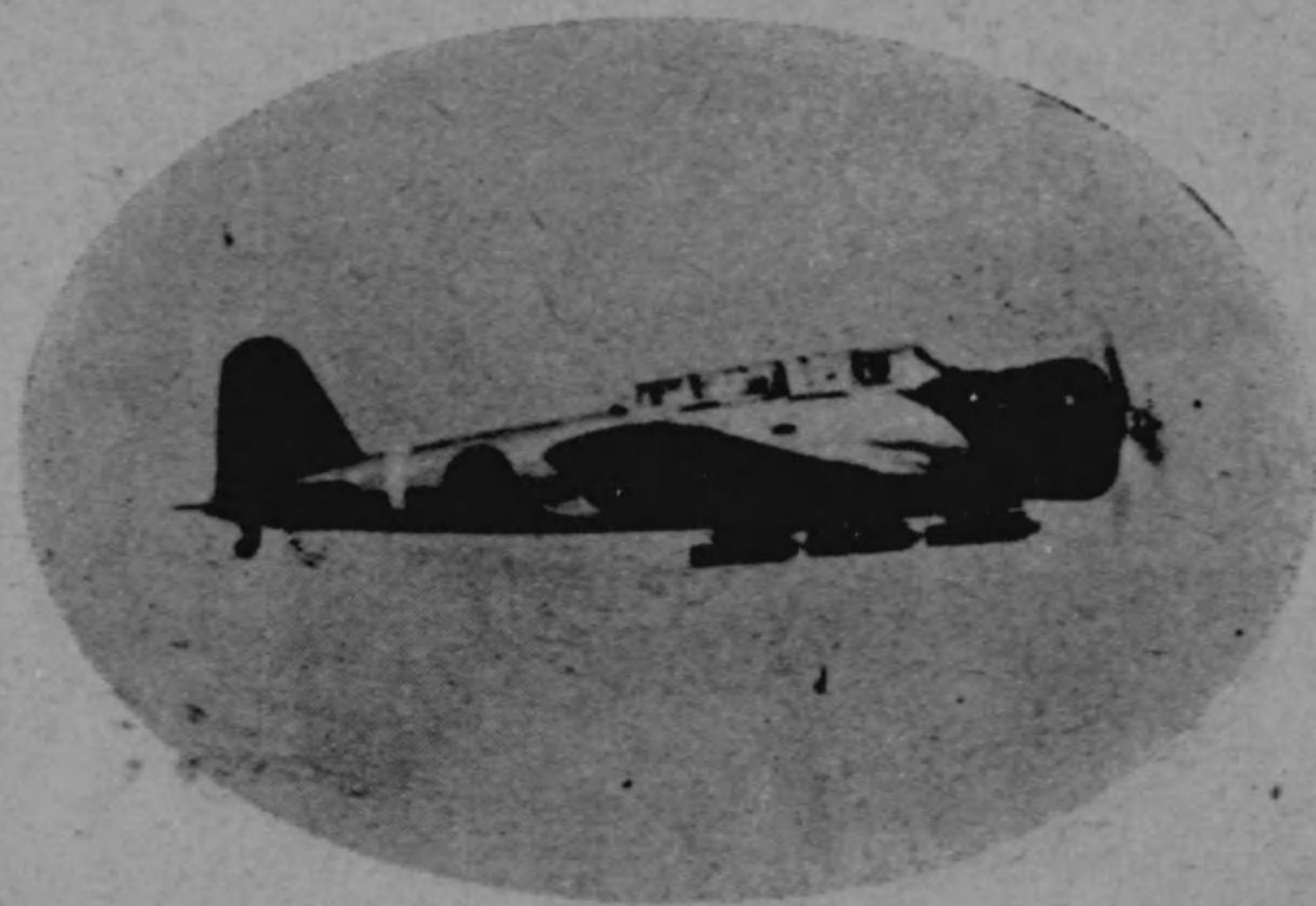


艦上爆撃機

海軍省檢閱濟
乙第 1962 號

特殊飛行	72
大空に孤を描いて	72 73
特殊飛行に於ける 操縦者の表情	74 75
海軍機の種類	76
海軍機の特殊性	78
定着(制限着陸)	80
計器飛行の練習	81
整備作業	83
卒業前の編隊 飛行練習	84 85
航法	86
教室にて	87
機上作業	88 89
寫真銃射撃	90 91
卒業飛行	92 93
海洋航空の重要性	94
空を壓する爆撃行	96 97
「空の少年兵」映畫撮影に就て	98
練習機に据えつ けた映畫撮影機	98
空中撮影の實況	100

—目次終—



艦上
攻撃機

海軍省檢閱濟
乙第 1963 號

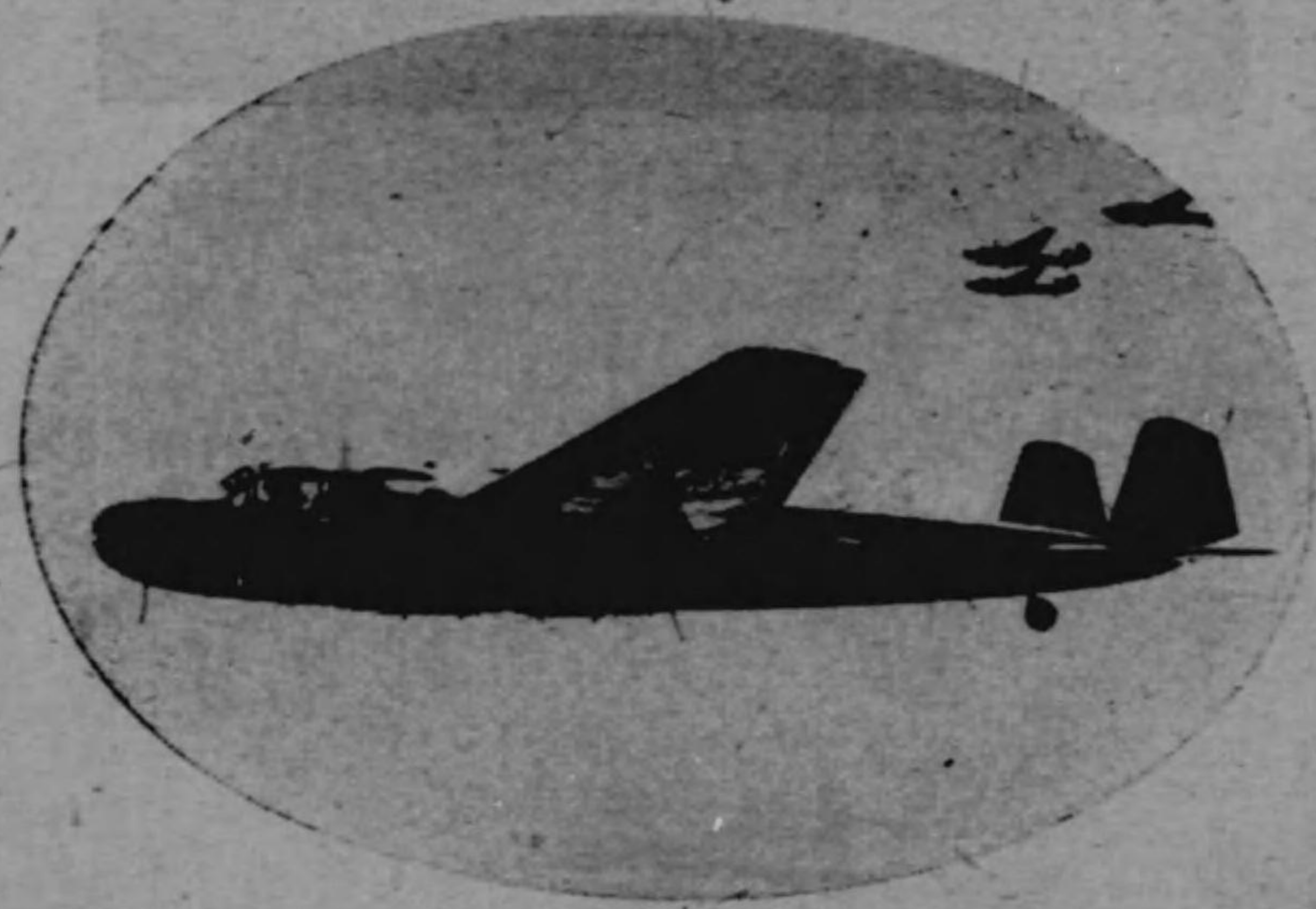
地上鍛錬篇



海軍省檢閱濟乙第 1994 號

陸上攻撃機

海軍省検閲済乙第1964號



“空の少年兵”とは

“空の少年兵”には、甲種飛行豫科練習生と、乙種飛行豫科練習生の二種がある。甲種豫科練習生は、満十六歳から十八歳までで、中學第三學年修了程度の學力あるもの、乙種豫科練習生は、満十五歳から満十八歳までで、高等小學卒業程度の學力あるものといふことになつてゐる。

これ等の練習生の入るところは、茨城縣土浦市外にある、土浦海軍航空隊である。昭和十五年十一月までは、霞ヶ浦海軍航空隊内にあり、飛行豫科練習部といつてゐた。

常磐線土浦驛よりバスにのり、しばらく行くと、海のやうな大湖水、霞ヶ浦が展開する。その湖水に面して、果もなくのびひろがる練兵場(飛行場ではない)、いくつもの廣大な建物、そこが、我が海鷗の雛を育てあげる鍛錬場である。

空には各種の飛行機の轟音がいつばいにひろがり、湖面には白波を蹴立てて、水上機が滑走してゐる。心ある少年にして、ひと度この雰圍氣に接すれば、誰しも“空の少年兵”たるべく志さすにはゐられないであらう。

しかし、そのあこがれの“空の少年兵”の生活に入る前には、いくつもの難關を突破しなければならない。海軍關係では、江田島の兵學校と共に、飛行豫科練習生の試験が、最も高度のものとしてゐるのである。

入 隊 試 験

それでは、その試験はどんな風に行はれるか。場所や方法は多少変わるが、先づ、全国各府縣で、第一次試験が行はれる。それで選抜されたものが、土浦海軍航空隊に集められ、第二次試験が行はれる。その内容は、身體検査、心理適性検査、智能検査、口頭試問等である。

海の荒鷲を目ざして全国から
この受験場に集る少年たち



受験者附添の父兄に挨拶する副長

このうちの適性検査と身體検査は、他の一般の隊や學校へ入るためのそれとは、全く趣を異にしてゐる。

適性検査は、飛行兵に適する人間であるかどうかを、心理的に調べるのである。そしてそれは、いづれも精巧な機械によつてなされる。その一つ二つをあげて見ると、操縦動作検査は、空中で飛行機を操縦してゐる時、外部の變化に對して、正しく應じ得るかどうかを、その動作によつて調べる。これは、自ら操縦桿をにぎらせ、教へられた通りにやらせて見る。協應操縦動作検査は、操縦桿と踏棒を操り、前面にある二本の針を、モーターで動いてゐる他の一本の

針へ重ねさせて見る。その上手下手によつて、操縦者としての適性度合が検出されるのである。その他、速度目測、複雑選擇判斷、處置判斷、形態記憶、間歇記憶等々の検査があるが、いづれもみな受験者の適性度を、最も科學的に検査するのである。

これに對して、身體検査では、肉體上の適性を検出する。従つて單に全身の健康状態を調べる普通の身體検査とは、全くやり方が違ふ。その數例をあげて見ると、呼氣力検査は、吸ひこんだ空氣を吐く力を調べるもので、水銀壓力計を出来るだけ高く吹き上げられるのがよい、水銀保留は、出来るだけ高くでなく、水銀柱を或一定の

口頭試問

試験官「その動機は？」



高さに、出来るだけ長く吹き上げておられる、その時間を調べる。飛行兵は、絶えず氣壓の高低の變化にあふもので、尋常の肺では、忽ちまゐつてしまふのである。

飛行兵にとつては、又、眼がよくなければならぬ。それで、眼に關する検査だけでも十種類ほど行ふ。

次に、最も特色的なものに、轉倒試験と廻轉震盪試験がある。轉倒試験は、受験者を一つの臺の上に立たせる。検査官がハンドルを廻すと、臺が次第に傾いてくる。その度合は目盛にあらはれる。こ

受験生 「私の隣村の間瀬航空特務少尉が、今度の事變で名譽の戦死をされました。そこで、私はその後継ぎをしようと思つてお願いしました。」



れによつて、何度までの傾斜に耐えられるかを調べるのである。

廻轉震盪試験は、受験者を廻轉椅子に坐らせる。椅子は機械仕掛でぐるぐると廻り出す。それを止めると、かけてある受験者は、いきなりバネで放り出される。誰でも眼が廻る。これを三回くりかへし、眼のふるへがどれだけの時間で止まるか、どれだけの時間内に體のふらつきを止めて直立されるかなどの検査をするのである。

操・操動作検



14

視野測定 黒い板には目盛が刻んである。白い球がその線に沿つて左右に動く。視野の廣さを測つてみる。
左眼の前の白球は被検者の眼の位置を固定させるものだ。



15



水銀保留

一度肺の中に吸込んだ空気で、どれだけ長く水銀を吹上げておることが出来るか。

近点距離

これも視力検査の一つ。二本の棒が次第に接近する、見分けられる最近距離を検査する。



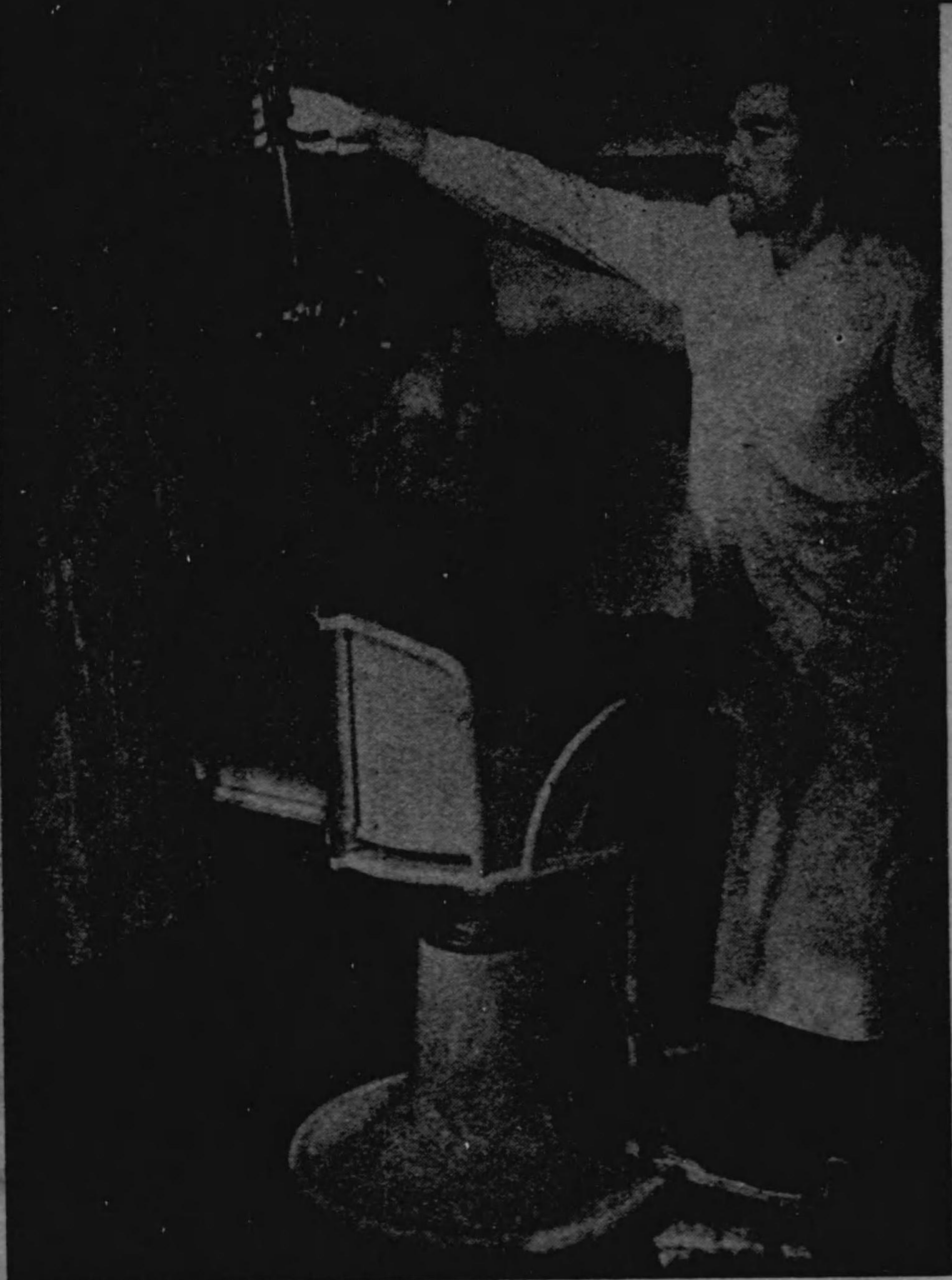
音叉

「きこえるか」
「きこえないか」



顛倒反應

臺の上に目盛が刻んである。
何度まで頭張れるかを調べるのであ



迴轉震盪

迴轉椅子は五回ばかり廻つてがちんと止る。試験官は前へ歩かせたり止らせたりする。身體の震ひが何秒で靜止するかを見る。身體の平衡作用を司つてゐる神經の調節をしらべるのである。

眼球震盪

眼球は今までぐるぐる廻された慣性で片方に寄らうとする。これを眼筋で早く調節せねばならぬ。



入隊 第一日

かうしたおびたべしい試験を全部突破した者のみが、始めてあこがれの空の少年兵（飛行豫科練習生）の生活に入る。即ち、四等飛行兵として入隊するわけである。

この上もない希望と羨望の的だつた海の荒鷲、その荒鷲に今こそまがひもなく自分になるのだ。憧れてばかりいた昨日までの日々は……だが未来もまだ茫漠としてゐる。

入隊が決ると直ちに軍服その他の必要品が支給され、十六名一班

底のない軍帽も勝手が違つてうまく被れたのかどうか不安である。



嬉しいおもはゆい
様なひととき



となり、班長の統率下に入る。

隊では、ハンモックに寝る 即ち、軍艦と同じである。真白い毛布には、青く錨の模様が染め出されてゐる。枕元には軍服がきちんとたゝまれ、その上に「大日本帝國海軍」といふ、金色の文字の入った帽子がのせられてゐる。見渡すかぎり、廣い兵舎内は、たゞハンモックである。

土浦驛を、一番列車が出る時分、廊下にこつ、こつと靴音がひびく。そして、ピーツと號笛が鳴る、續いて「總員起し五分前！」と叫ぶ當番兵の聲。續いて元氣の良い起床喇叭だ。ハンモックが一せいにゆれ、毛布の中から、何百といふいがぐり頭が、によきによき

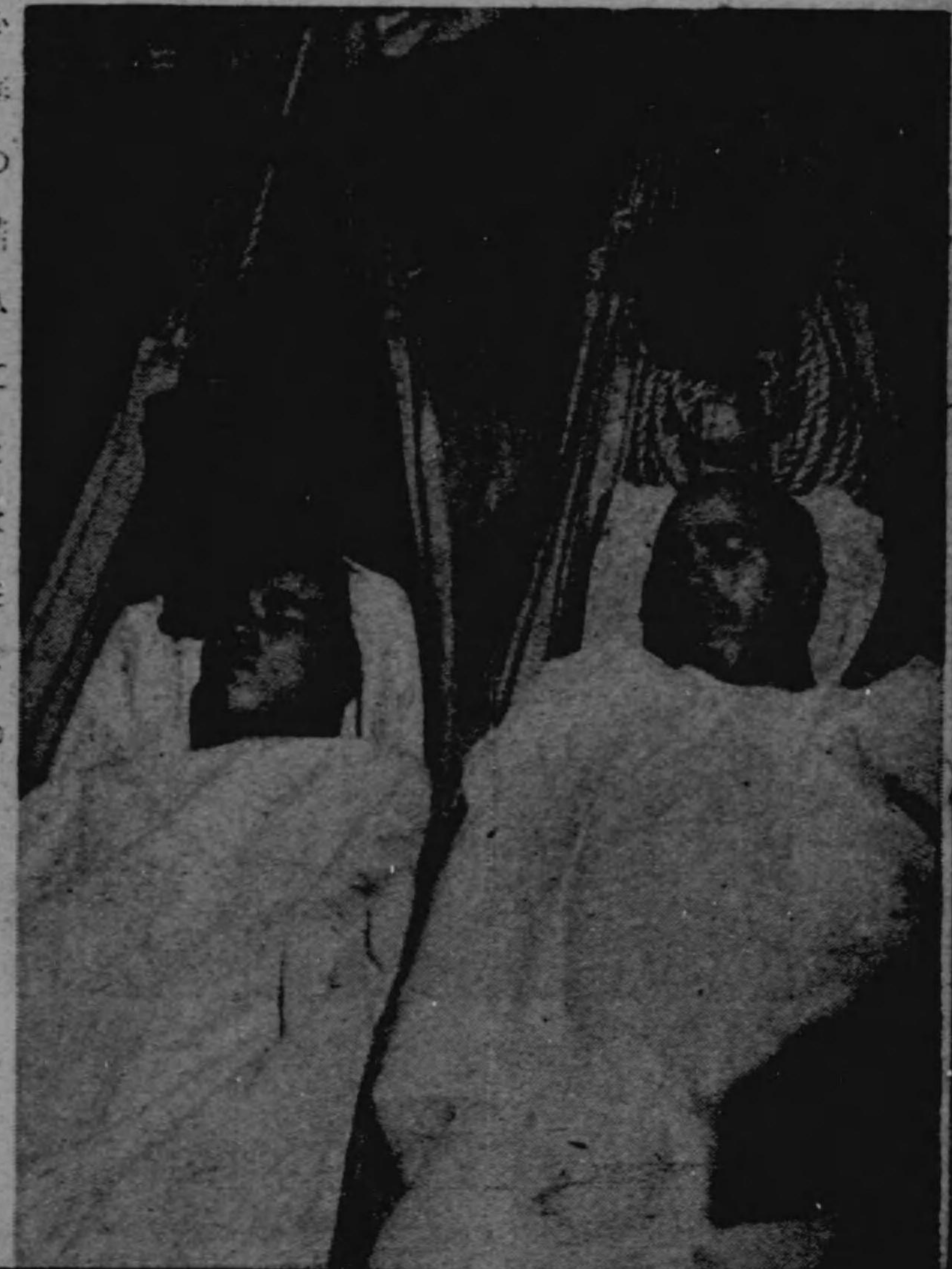


と現れる。入隊第一夜、希望や不安に胸が一ぱいになり、誰もが安眠はしてゐないのだ。

やがて、勇しい起床ラッパ。若鷺共は、いなごのやうにハンモックからとび降り、昨夜班長から教へられた通り、ハンモックをたゝみ、納戸へしまひこむ。そして、洗面。

あこがれの少年飛行兵の第一日は、いよいよ開始されたのである。洗面を終つて練兵場へ駆けつけると、上級生は既に整列を終つてゐる。新入生も大急ぎでそれに倣ふ。全部の整列がすむと、臺上の當直教官から、脱帽と號令がかかる。まづ、明治天皇の御製「あさみどり澄みわたりたる

大空の廣きをおのが心ともがな」が一同で奉唱される。清明な朝の大氣をふるはして、若人の聲は湖水の上へひろがつて行く。續いて宮城遙拜この朝のひと時の、あまりの崇高な氣分に打たれ、新入生はわけもなく涙を催さずにはゐられないのだ。



あまみどり

澄みわたる

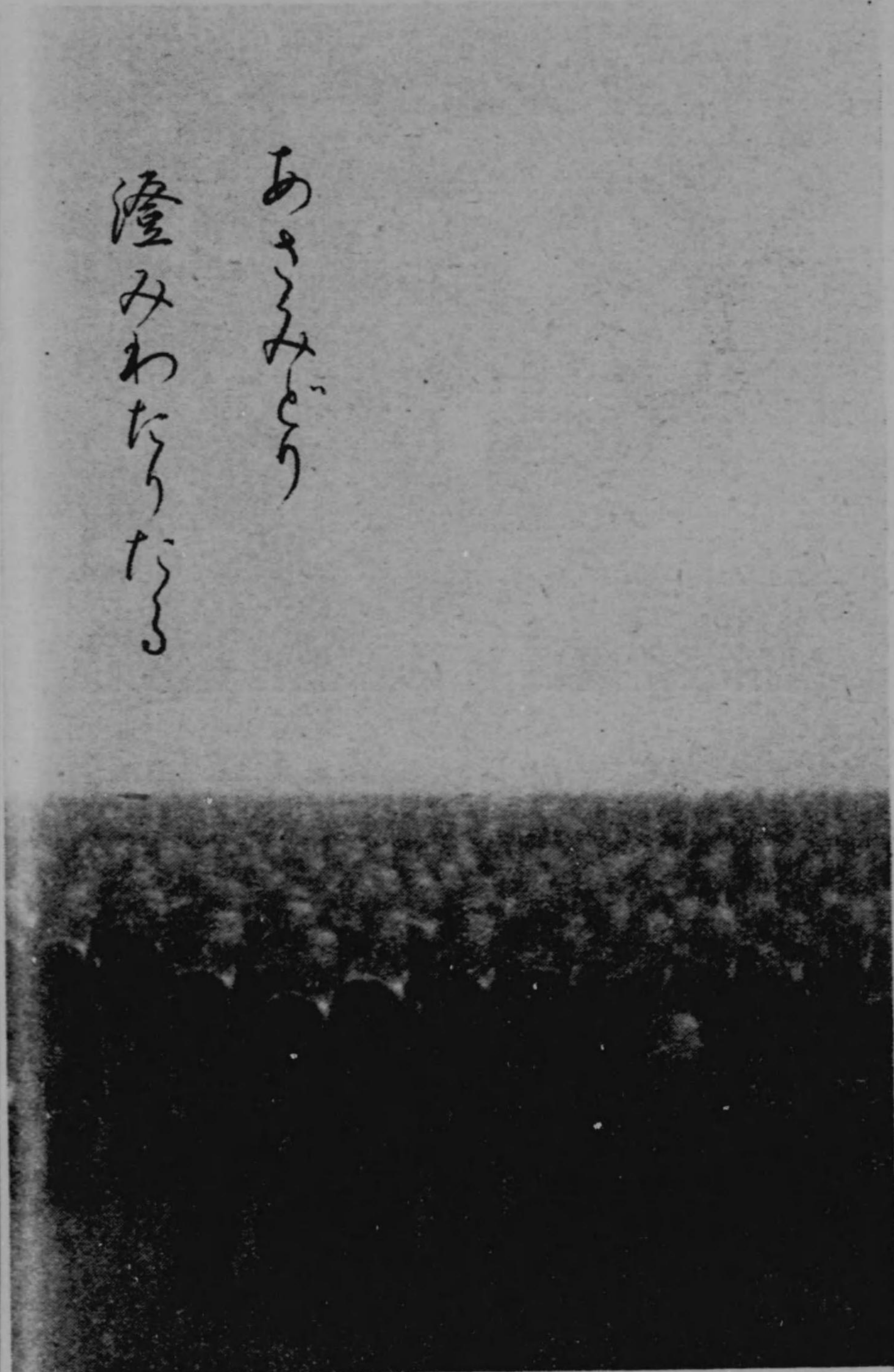
大空の

ひろき

おのがこころ

あまみどり

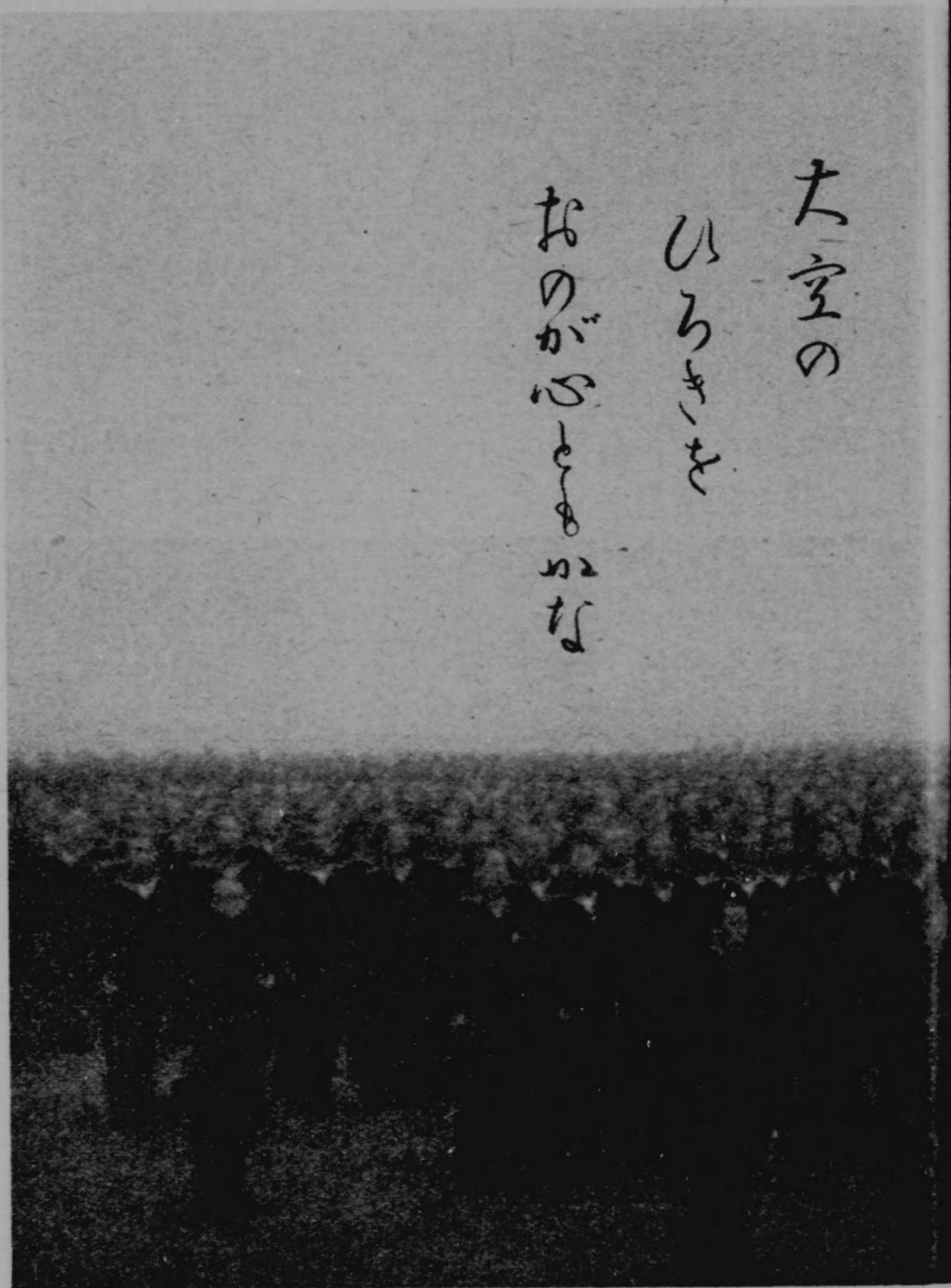
澄みわたるたる



大空の

ひろき

おのがこころかな





朝の體操

朝禮の後に體操がある。これも、航空員に適するやうに、特別に工夫されたもので、世間一般の、或は他の軍隊の體操とは、大分調子のちがふものである。

體操がすむと兵舎の掃除である。掃除といつても、てんでんばらばらに掃いたり、拭いたりするのではない。上級生が監督に立ち、一々その號令に従つて行動する。新入兵は誰一人として兵舎のどこもこゝも、塵一つとゞめず、磨き上げられてゐるのに驚かすにはゐられないが、自分が直接掃除をやらされて見て、始めてなるほどとその綺麗なわけがうなづけるのである。

掃除終つて朝食、かくして、齒車のやうに正確に、訓練の日課はすゝめられて行く。

先づ立派な海軍軍人に

いはゆる少年飛行兵となれば、最初から飛行機に乗る練習をやるものと考へたら、とんでもない間違ひである。

飛行豫科練習部は、入隊した練習生を、飛行兵に仕上げるための機關であることは確かである。しかし、その飛行兵は、飛行兵である前に、一人の完全な海軍軍人であらねばならない。一人の完全な海軍軍人である前に、一人の完全な日本國民であらねばならない。それで、飛行豫科練習部は、數學、化學、歴史、英語、……等の學課によつて知識的に國民教育を施すと同時に、陸戰、短艇、水泳、武道、體技、艦務實習、兵術、等々の諸訓練によつてまづ一人の立派な海軍軍人たらしめるべく努力する。そして、それ等の諸訓練は、單に技術の上達だけを目標とせず、その訓練を通じて、崇高にして勇猛な日本精神の錬成を目的としてゐる。直接飛行機、或は飛行に關するものには、整備教務、通信教務、地上練習機等々の學課があり、發動機の分解、組立等の課目もあるが、かういふ種類のものだけで、飛行訓練も、ほんの初歩程度のものにとゞまり、本格的な訓練は、こゝを卒業してから徹底的になされる。

教室風景

英語教室



数学教室

教官 「飛行機が、水平飛行をし乍ら爆弾を投下すれば、爆弾は常に飛行機より後方にあるものである。それはどう云ふ理由によるものと思ふか、足立」

練習生 「はい、飛行機は等速度運動をしてみますが、爆弾は空気の抵抗により水平速度が次第に減少するからであります、終り。」

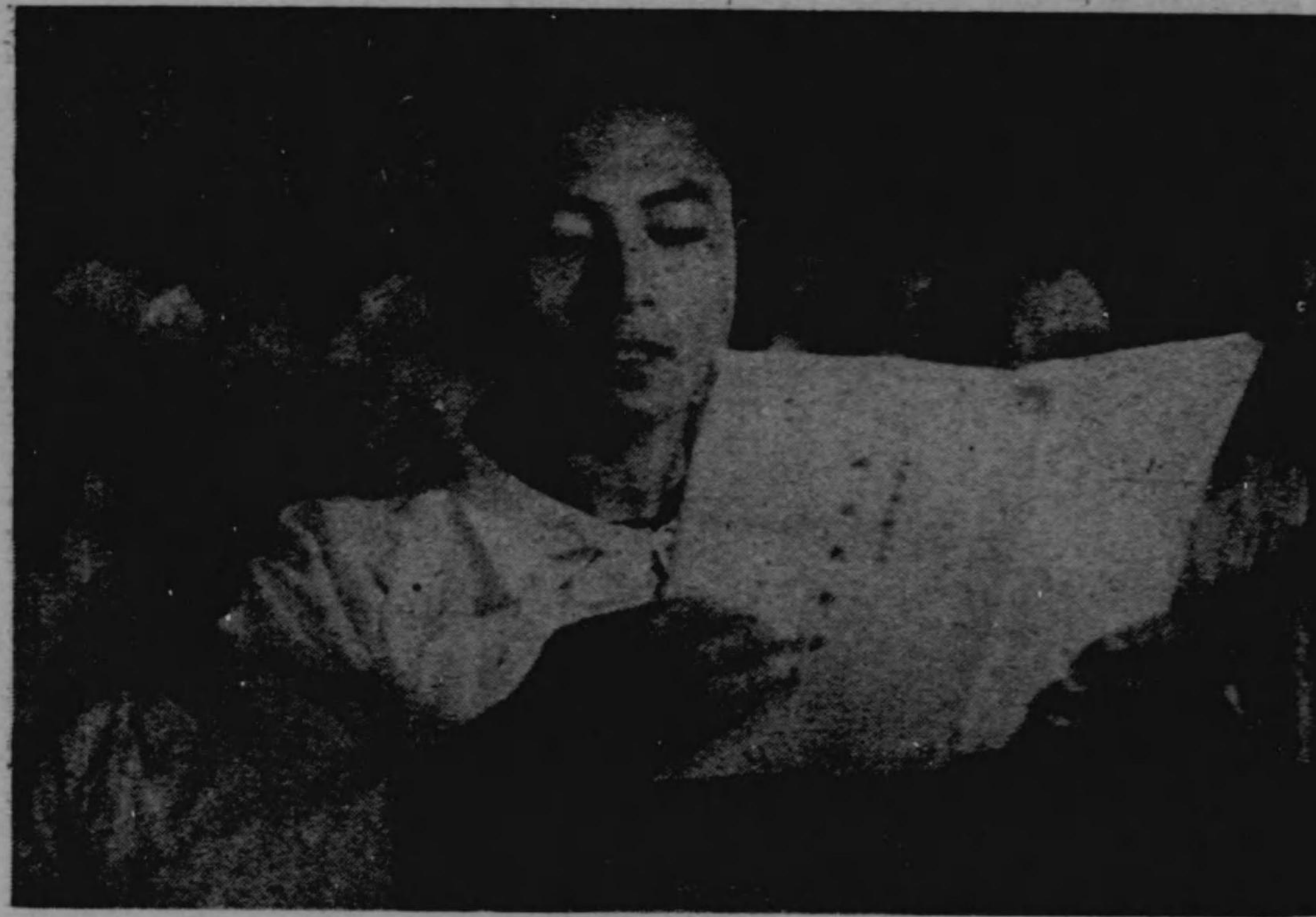
歴 史 教 室

練習生 「國際聯盟難脱

さきに滿洲事變勃發するや時宛も開會中なりし國際聯盟理事會は支那側の提訴に基き直ちにこれを同會の審議に附し日本軍はなるべく速かに滿鐵附屬地内に撤退し支那政府は責任を以て附屬地外の日本人保護に當るべきを決議したり」

教 官 「よろしい、次 花田」

練習生 「はい、我政府は聯盟の意思を尊重し、極力これが實行を圖りたるも如何せん、支那側にこれを實施するの誠意と實力なし、その内匪賊は所在に出沒して治安を攪亂し、邦人の不安名狀すべからざ

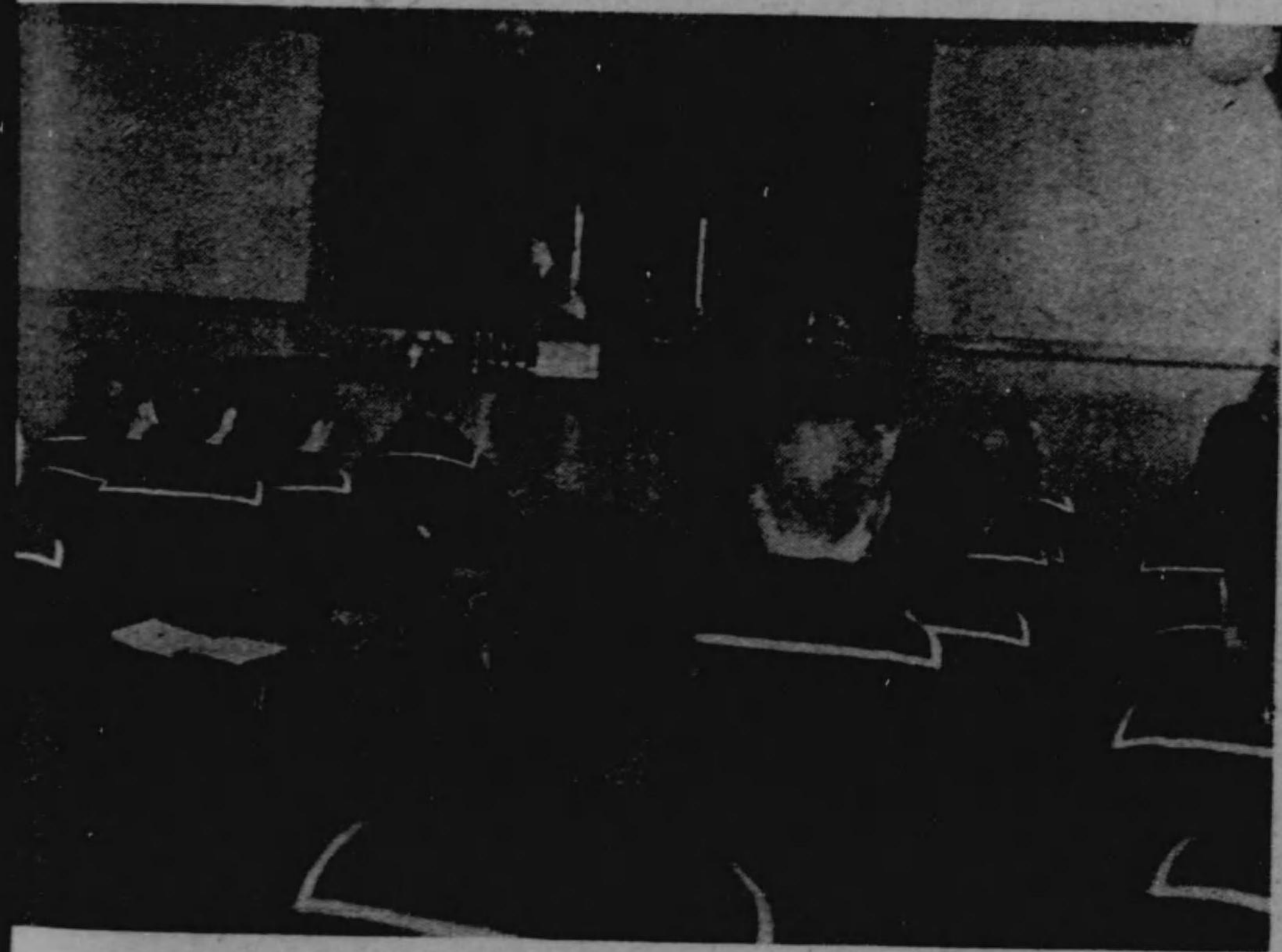


るものあり。」

教 官 「よろしい」

化 學 教 室

教 官 「現在實際に航空機用燃料として使用せられてゐるものは、直溜揮發油と分解揮發油とが大部分であつて、天然瓦斯揮發油と水素添加揮發油とは極少量使用せられてゐる状態である」



通信教務

通信は艦隊の耳となり眼となる。

少年飛行兵の重要な教科の一つである。



手旗信號

陸戦

諸訓練のうちの一つ陸戦であるが、これは、上海陸戦隊等でおなじみの、真白い脚絆をつけて行はれる。この扮装をするだけでも、少年達の血は湧立つのである。その訓練は、氣をつきの姿勢から、擧手の敬禮、射撃、突撃、散開、歩哨、傳令、等々、陸戦の全般にわたつて行はれる。

飛行兵だからといって、空中勤務さへ出来ればよいといふわけには行かない。軍艦に乗組まうと、飛行機に乗組まうと、既に軍人で

ある限り、どのやうな戦闘にも、ひけをとらぬ訓練をつんでおかねばならないからである。又、身をもつて陸戦の経験をつんでおくと現在の支那事變におけるやうに、陸軍部隊との共同作戦に臨んでも最高度に効果をあげることが出来るからである。

隊の練兵場での諸訓練に熟達すると、普通の陸兵のやうに、野外演習を行ふ。遠く神奈川県の辻堂あたりまで出かけ、一週間ぐらゐ



海軍省檢閲演乙第 1965 號



海軍省檢閲演乙第 1966 號

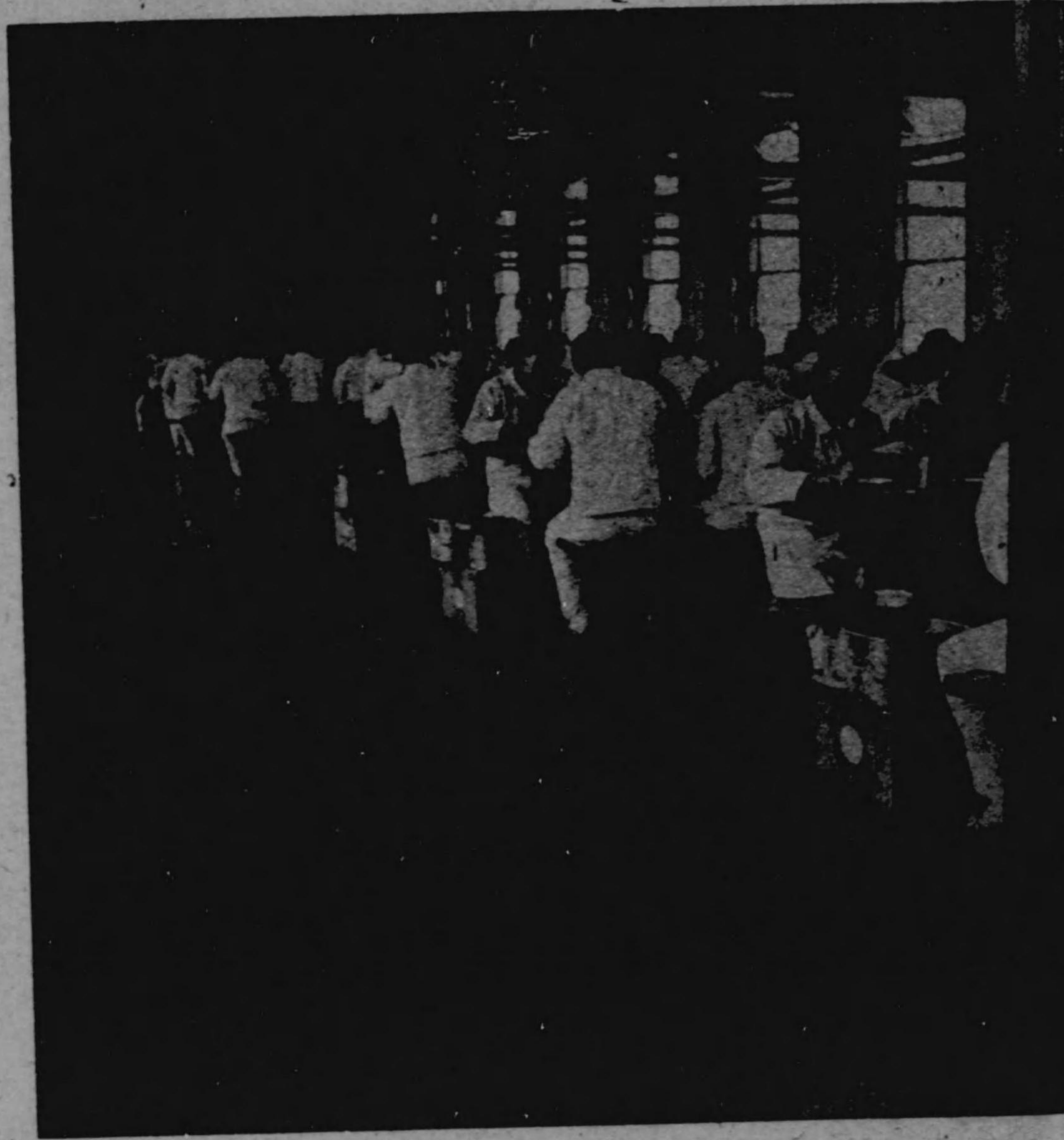


海軍省檢閲演乙第 1967 號

民家に合宿して、連日連夜、猛烈な演習を續けるのである。やがては虚空に雄飛すべき少年達が、或は劍を握り、或は機銃を握り、泥にまみれ草にはひ、熱火のやうな訓練をつゞけるところ、そこにこそ我が海軍本來の強味がはぐくまれるのだ。

食卓番

烹炊所（賄所）から、食器や飲食物などを、兵舎へ運ぶ係を食卓番といふ。四名で一組となり、一人は食器、一人は湯茶、他の二人は飯や菜を運ぶ。

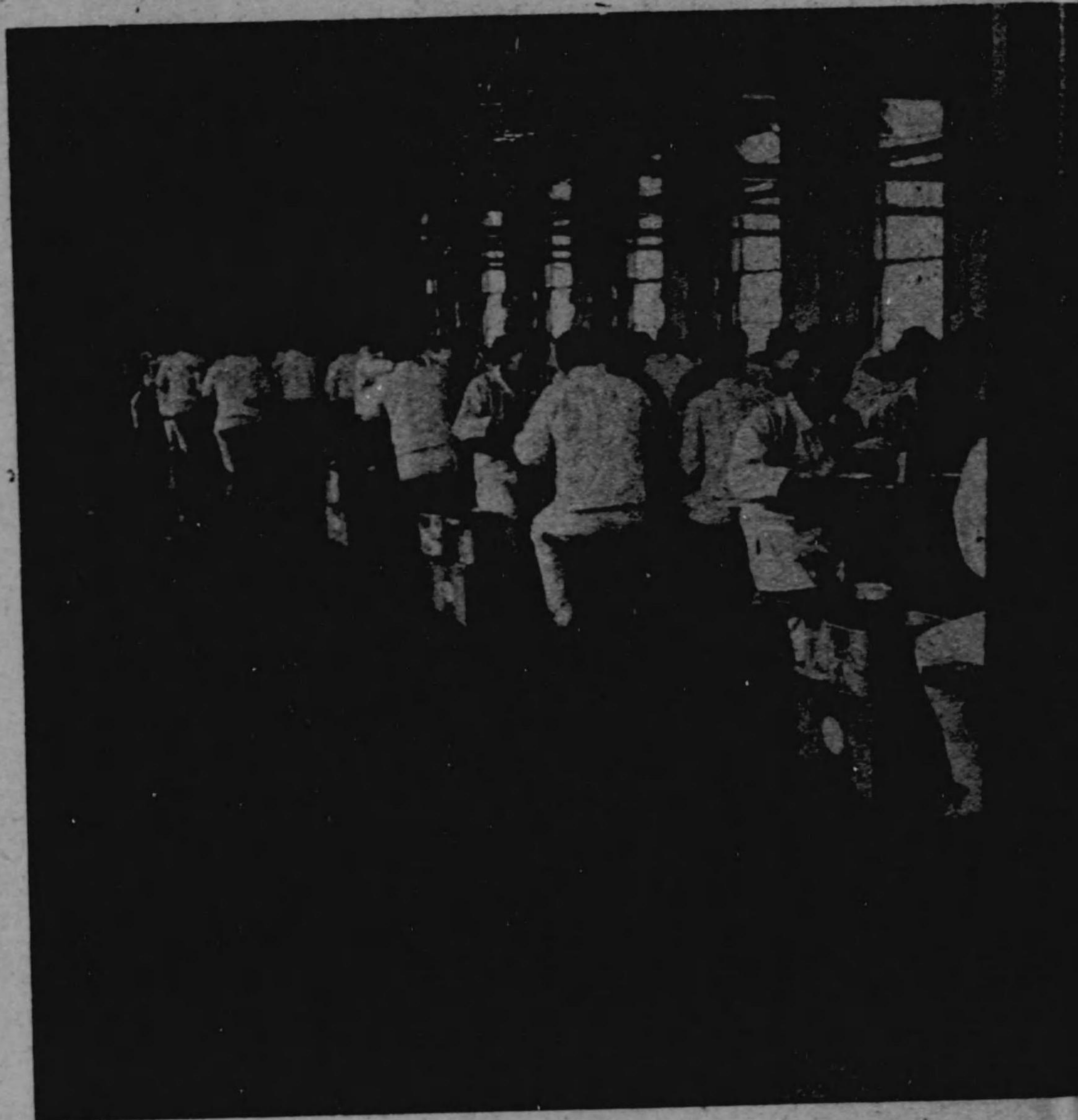


兵舎には、長さ五米、幅一米ぐらゐの大テーブルがある。これに一班十六名が向ひあつて坐り、端の一方に班長が坐る。つまり、班長の坐は、一目で十六名の部下を見渡せる位置にあるわけである。

食卓番の食器係が、一人あたり四箇づつの食器を並べて行く後から、それぞれの係が汁を入れたり、飯をもち込んだり、分業的にやつて行く。細長い兵舎の中には、一方にいくつもこの大テーブルが並んでゐる従つて、各班おのづから競争となる。出来

食卓番

烹炊所（賄所）から、食器や飲食物などを、兵舎へ運ぶ係を食卓番といふ。四名で一組となり、一人は食器、一人は湯茶、他の二人は飯や菜を運ぶ。



兵舎には、長さ五米、幅一米ぐらゐの大テーブルがある。これに一班十六名が向ひあつて坐り、端の一方に班長が坐る。つまり、班長の坐は、一目で十六名の部下を見渡せる位置にあるわけである。

食卓番の食器係が、一人あたり四箇づつの食器を並べて行く後から、それぞれの係が汁を入れたり、飯をもち込んだり、分業的にやつて行く。細長い兵舎の中には、一方にいくつもこの大テーブルが並んでゐる従つて、各班おのづから競争となる。出来

るだけ早く、同時に出来るだけ見事に、仕事を完了した方が自慢でもあり、お腹をすかし切つてゐる戦友から感謝もされる。

配膳が終ると、食卓番の一人は、

「第何班長、第何班食事用意よろしい。」

と報告する。班長は、食卓の上をひと睨みしてから、

「よし、つけ。」

と命令する。それまで外の方を向いて整列してゐた戦友たちは、この命令一下、一せいに廻れ右をして席につく。そして、敬禮が終るや否や、かぶりつくのである。その食慾のはげしさ、ものの二、三分間で、すべての食器の底が、眞白くあらはれるのである。



短艇

短艇の訓練は、目前の霞ヶ浦でなされる。一班十六名中、十二名が漕操員、四人は豫備員となる。班長は顎紐をかけ號笛を持つて乗込む

短艇といつても、遊覽地などにあるボートとは物が違ふ。海軍用のカッターである。従つてその櫂も、材木のやうに太く、大きく、重い。新入兵は、これがほんとうに漕げるかと思ふ。しかし、班長は容赦もなく、「櫂用意」と叫ぶ。次いで「前へ」と號令する。これで一同の櫂が水につかる。これから先は、號笛で命令する。櫂を水につける——體が横に平になるまで後に引く——再び櫂を元の位置に返す。ピーッピーッの調子がくりかへされる。



この間も班長は、間断なしに姿勢や漕ぎ方に注意を與へたり、叱つたりする。しまひには自分の腕といふ氣がしなくなる。氣が遠くなつて、何をしてゐるのかもわからなくなる。

海軍軍人にとつて、短艇を漕ぐことが大切であることはいふまでもない。しかし、この訓練では、漕ぐことそのもの以上に、「がんばり」の精神を錬成する。従つて生徒は、漕ぎ方が上手になる前に、まづ肉體上のつらさ、苦しさを克服しな



帆走教練

ければならないのだ。短艇と共に、帆走の訓練も受ける。およそ船の「性格」をつかむには、帆走に慣れるにこしたことはない。同時にまた、帆走に上達することは、——短艇でも同様だが、協同一致の精神を馴致する。乗組員中、一人でも勝手な動き方をすれば、たちまち全體の能率を低下させるからである。



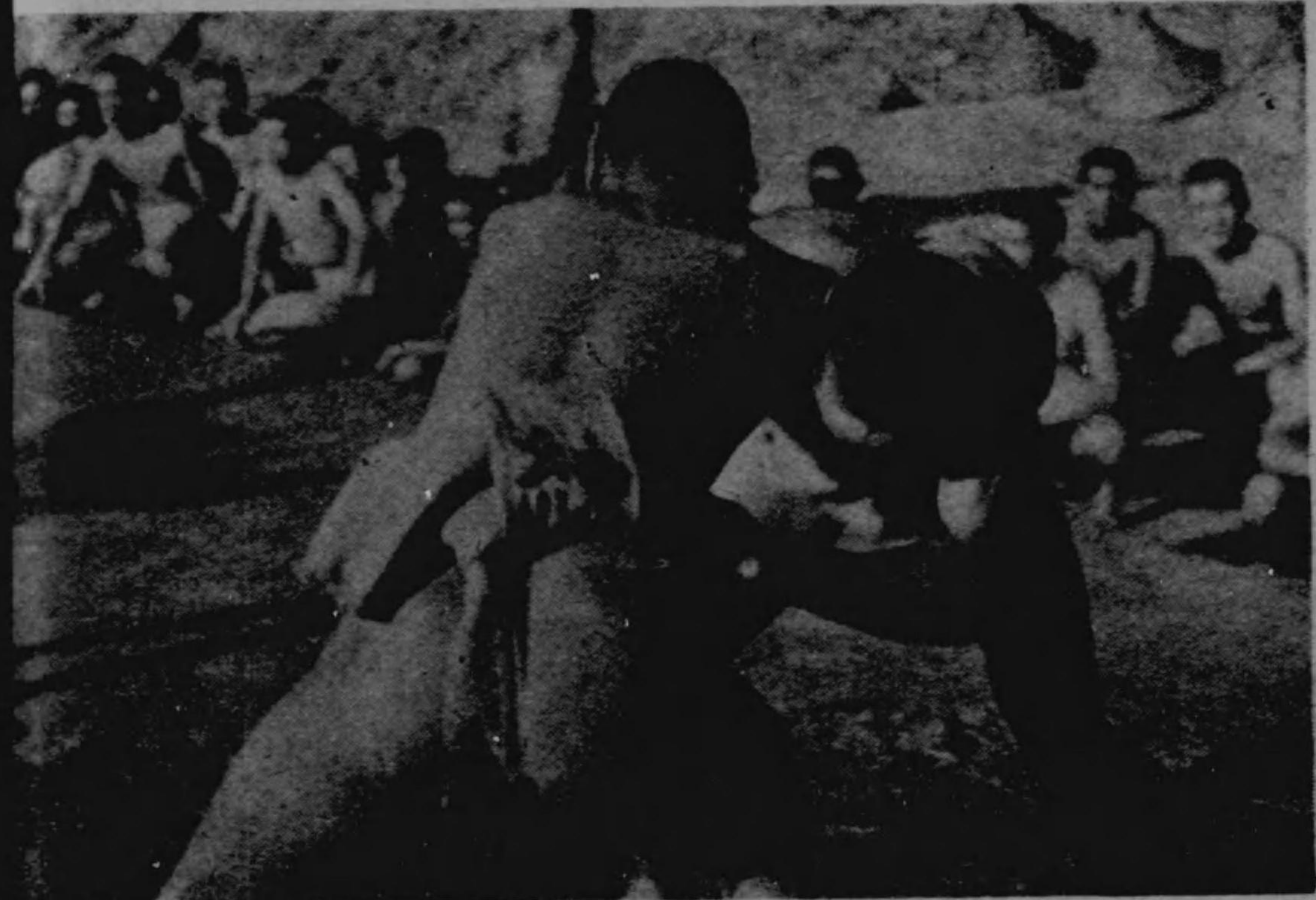
水 泳



運 動 の 種 々

少年飛行兵は、水泳、相撲、鐵棒、ラグビー等をやらねばならぬやつてもやらんでもいゝといふわけには行かない。娯樂ではなく、すべては、旺盛なる戰鬥精神と、戰鬥實力の養成を目的とするものであるからだ。

水泳、相撲、鐵棒等は、より實用的である。しかし、飛行兵とラグビーとの關係は？ ラグビーは、あらゆるスポーツの中で、最も強烈な攻撃精神と犠牲精神を必要とするものだ。ボールを抱へて突進する敵に、身を挺してとびついて倒すタックル、自らボールを抱



へて幾重もの敵陣を突破する突込み、倒れては起き、起きては倒れ、最後まで攻撃をゆるめないがんばり、これ等はすべて我が海軍の傳統精神そのものだ。同時にそれは、我が海軍航空隊のモットーでもある。

事變當初、敵の戦闘機と水上機でわたりあひ、そのフロートで敵機をたゞき落したものがあつた。例の堅村兵曹は、片翼で歸還した。又機上で戦死し、基地へもどつてから、銃把を握りしめてゐる指を離すのに骨の折れたものがあつた。我が海軍機は、どんな攻撃を受けても、どんな荒天に際しても、始めの目的を中止したことはない。すべてはタックルであり、突込みであり、がんばりである。



武 技

少年飛行兵は、また剣道もやる、柔道もやる。銃剣術もやる。いづれも實戦に役立てると同時に、崇高な武士道精神を涵養するためのものだ。又、空翔ける飛行兵が、かういふ面にまで、その訓練を

ひろげてゐるところに、我が海軍航空隊の警石の強味のあることが知られるのである。剣道の時間には、竹刀でうち合ふこと以外に、本物の刀で物を斬る訓練も行ふ。敵地向ふ時、その乗組員が日の丸の鉢巻をしめ、背に日本刀を帯びて行くのも、決して伊達のしわざではないのである。

銃 剣 術



整備作業と艦務實習

少年飛行兵は 將來は操縦か偵察か、いづれかに行く。操縦者は戦闘機なら、操縦も戦闘も一人でやる。爆撃機は操縦が専門となり偵察員は、偵察の他に、爆撃や通信等をやる。しかし、いづれにしても、身を機に任せ、その機的能力を十分に發揮させるためには、發動機のことにも知つてゐなければならぬ。まして、發動機の故障に對して、不時着地や、飛行中に、應急の手當を加へなければならぬこともあるのである。それで、元來は地上勤務員の受持である發動機の整備作業もやるのだ。分解をやり、洗滌をやり、組立をやり、運轉をやり、發動機の理論と性格を、しつかりつかまへておくかうしておいてこそ、ふだんは自分が手がけないにせよ、とつさの場合にも、あやまりのない處置を講ずることが出來、行動中にも、愛機の生命の素である發動機に、全能力を發揮させることも出来るわけである。

又、少年飛行兵は、將來、陸上の航空隊にも勤務するが、同時に航空母艦にも乗組まなければならぬし、戦艦や巡洋艦などの大型艦に乗組んで、この艦載機の搭乗者ともならなければならない。

もともと、海軍航空隊の本來の立前は、あくまでも海上勢力の一部となり、或は味方艦隊に隨伴し、或はまた獨立して行動し、海洋上の制空權を確保し、海戦の勝利を味方艦隊へ導くところにある。

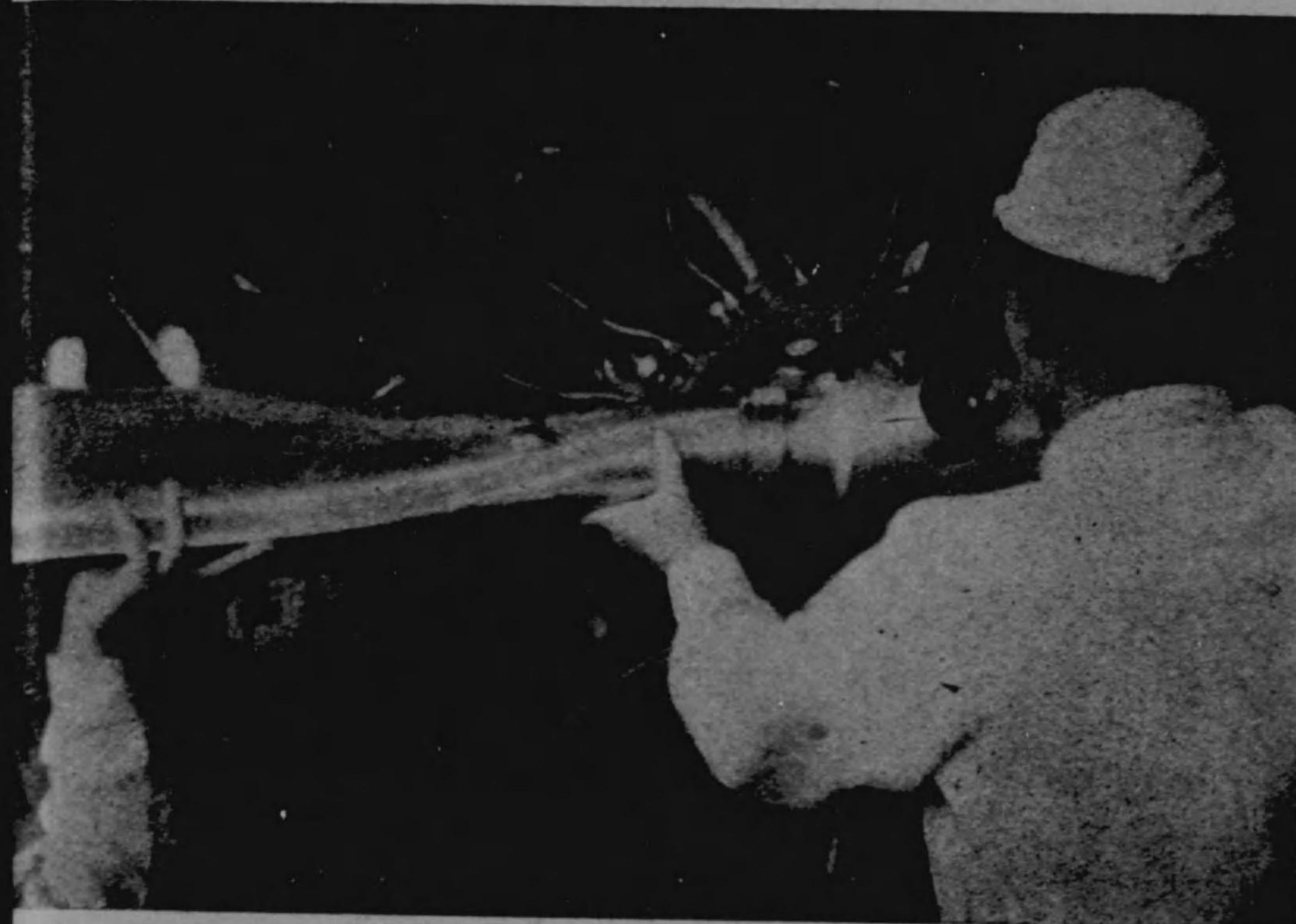
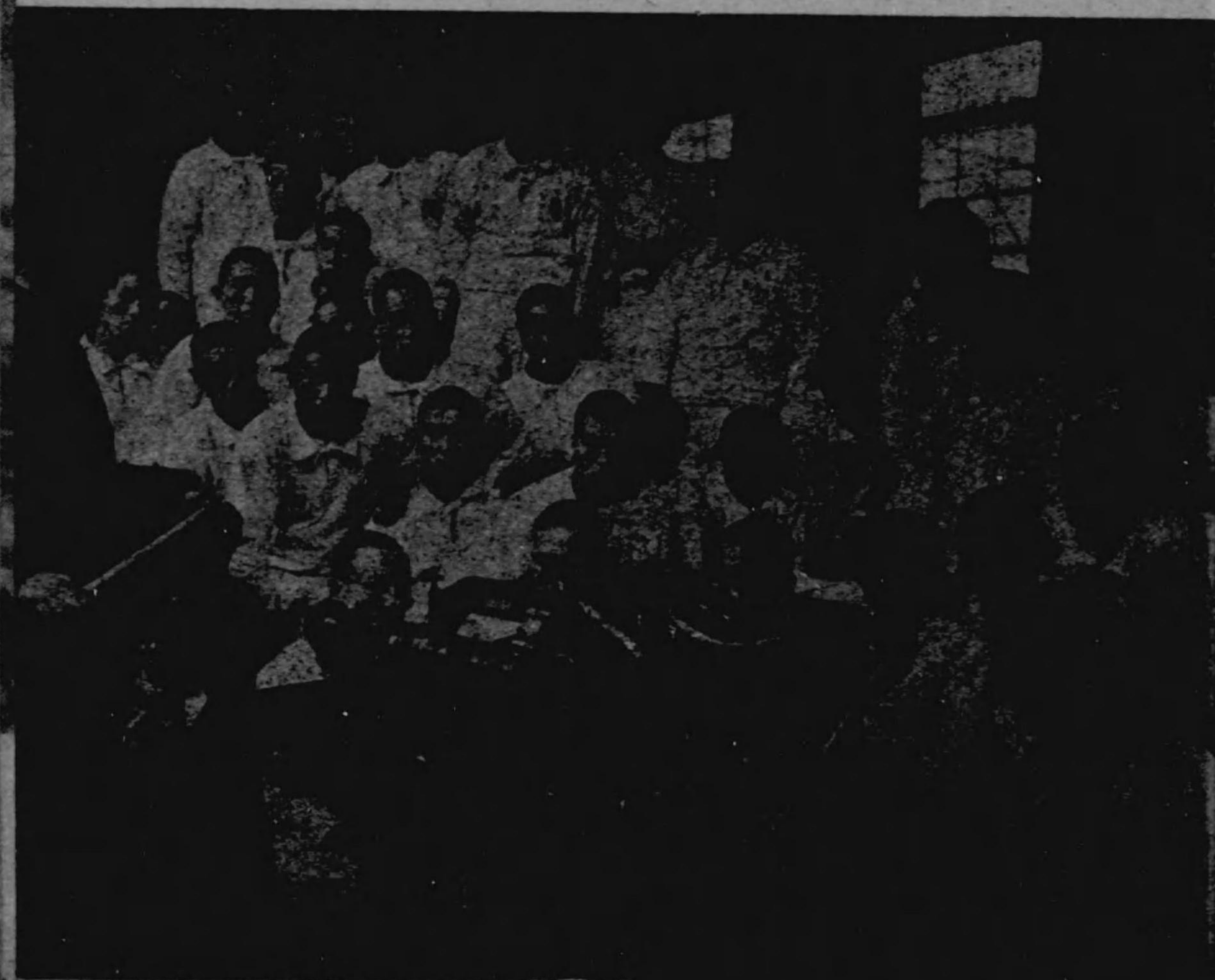
従つて、海軍飛行兵が海戦の實際を、よく知つてゐるとゐないとは、その戦果の上に雲泥の差を生ずることはいふまでもない。陸戦に協力する際のことを慮つて、陸戦演習をすら行ふ少年飛行兵で

ある。彼等が軍艦に乗組んで、艦務の一切を経験し、又、戦闘演習に参加して、その實際を體驗しておくことが、いかに有意義であるかは、容易に想像される。それで彼等は、毎年秋に行はれる海軍大演習に際しては、必ず軍艦に乗組んで、艦の人と全然同一の作業に従ひ、つぶさに海戦の本質の把握に努めるのである。

整備教務

發動機の構造について説明をきくと、やがて各自が分解洗滌組立にかゝる。

海軍省検閲演乙第 1969 號



試運轉 分解・組立の練習が終れば愈々試運轉だ

海軍省検閲演乙第 1970 號

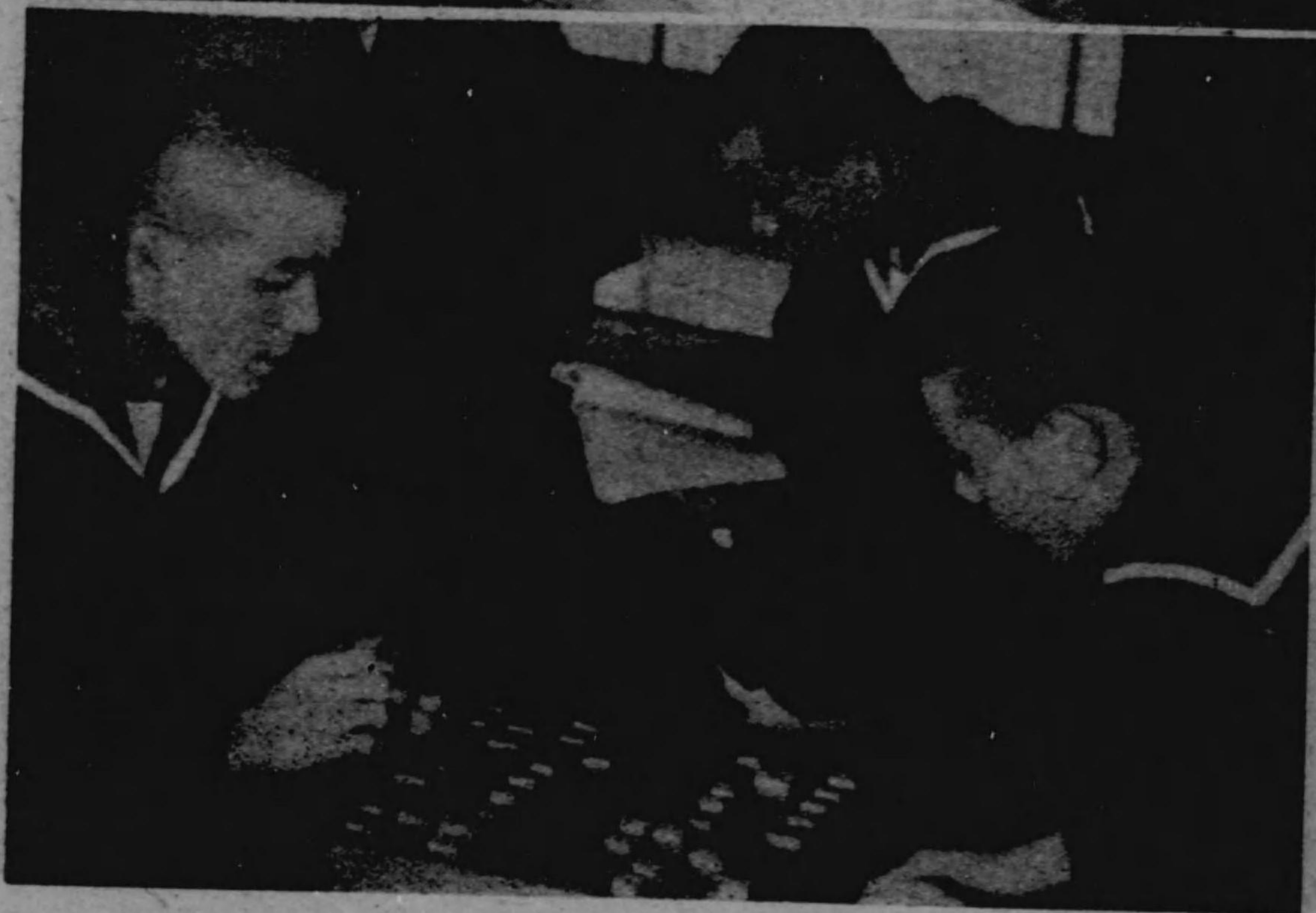
教員 「次は油をよくぬつて掃除をする、かゝれ、
……非常に高速度廻轉するためにクランク軸とプロペラの結合部に焼付を生ずる、この焼付を防ぐために塗布するのである。
プロペラの掃除、かゝれ、掃除の場合はメンノッブをよく合はせる。確實に掃除をやる。」

倶 楽 部

しかし、いかに飛行豫科練習生といつても、さうさう猛訓練の連続ばかりではたまらない。胸をわくわくさせて入隊した時、四等飛行兵だつた少年達も、三箇月たつと三等飛行兵となる。そのマークが、新しく腕につけられる時から、外出が許される。まる三月の間



初
の
外
出



日
曜
の
倶
楽
部

彼等は一步も隊の外へは出られなかつたのだ。まる三月の熱火の鍛錬は、彼等の根柢を、まづ一人前の海軍軍人に仕上げた。もう一人歩きさせても危くない。そこで外出が許される。

外出日には、班のもの連立つてクラブに行く。クラブといつても町の民家にかりてある一部屋だ。そこには、持寄りで買ひあつめた蓄音器や碁盤がある。久しぶりで寝そべる青畳が無性にいい心地だ。或ものはハーモニカをふく。或ものは本を読む。或ものは、議論をする。宿の小母さんにたのんで、めいめいの好物を買つてもらふ。

面 會

僅か見ぬ間に服も帽子もピッタリ身についた逞しい我が子の姿に父母の慈愛と慈愛の眼は光る



一同そろつて、遠足をやることもある。何もかも自由自在だ。この休息は、又倍舊の努力となつて、日々の訓練に拂ひもどされる。このクラブでの生活は、土曜の午後の面會日と共に、少年達の最上のたのしみである。

地 上 練 習 機

教室で座學的に航空の理論を十分詰めこむと、地上練習機によつて、その能力が検定される。地上練習機は、翼の長さ四米、胴の長さ一米半ぐらひあつて、臺の上に乗つてゐる。見た目には、遊覽場の玩具の飛行機のやうだが、計器類も一通りそなはり、操縦装置をあやつれば、實物と寸分の違ひもなく働く精巧なものである。たゞ實物のやうに前進しないと云ふだけである。

モーターにスイッチを入れると、機はある不正の運動を起す。練習生は、坐學で教へられたところに従ひ、敏速に機を正常状態にもどさなければならない。この検定を何回かやつてゐるうちに、その人の實力や適性度がはつきりわかり、同時に向上もしてくる。

地上での練習が一通りすむと、同乗飛行が行はれる。それがすむと検定飛行がある。検定飛行作業は、水平直線飛行、降下直線飛行、水平緩旋回、不良状態の回復等である。この時は、教官同乗で、離着陸は教官がやり、右の検定作業の時だけ、練習生が操縦するのである。又この飛行中に、教官は高等飛行をこゝろみ、練習生にそれを體驗させる。



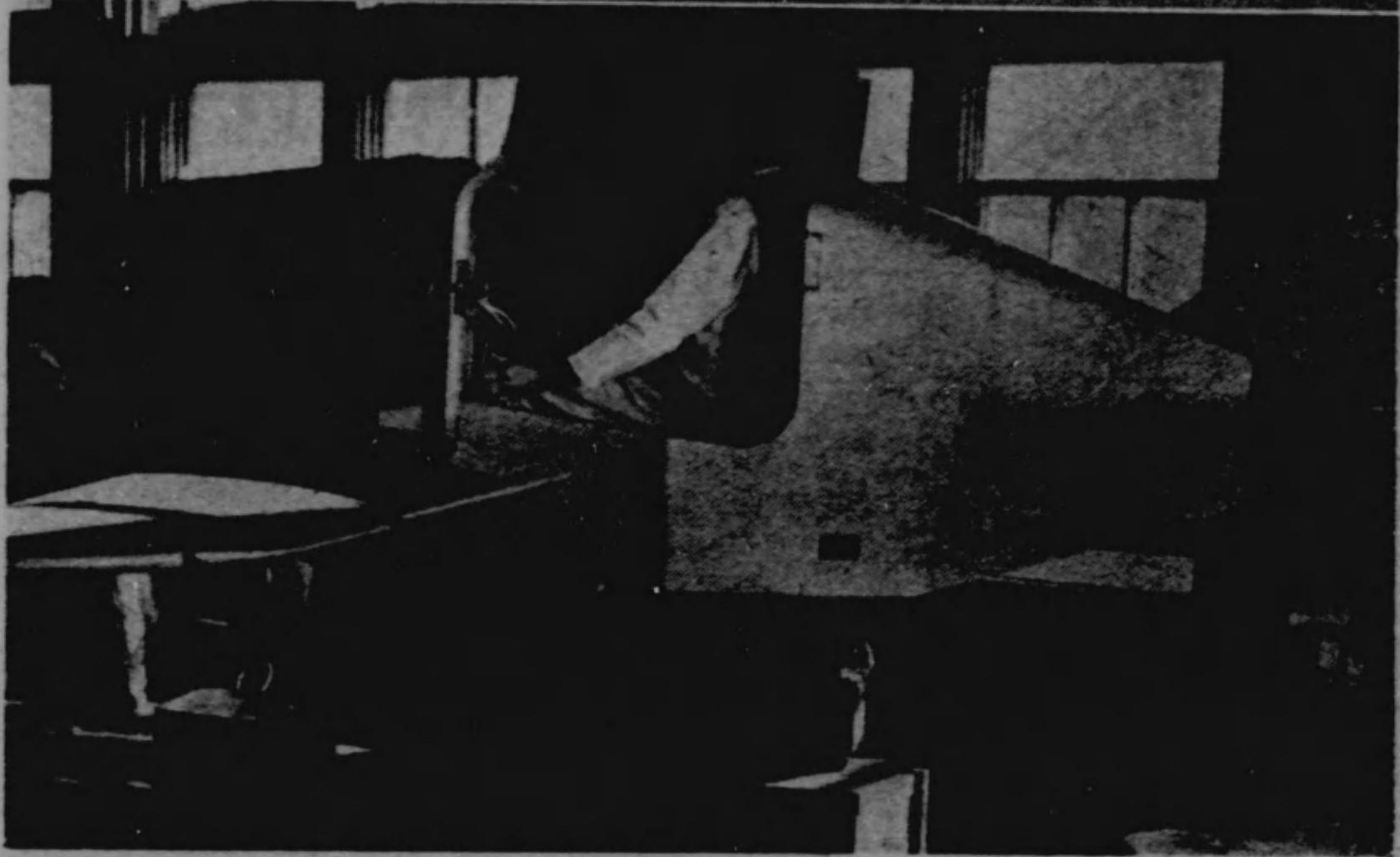
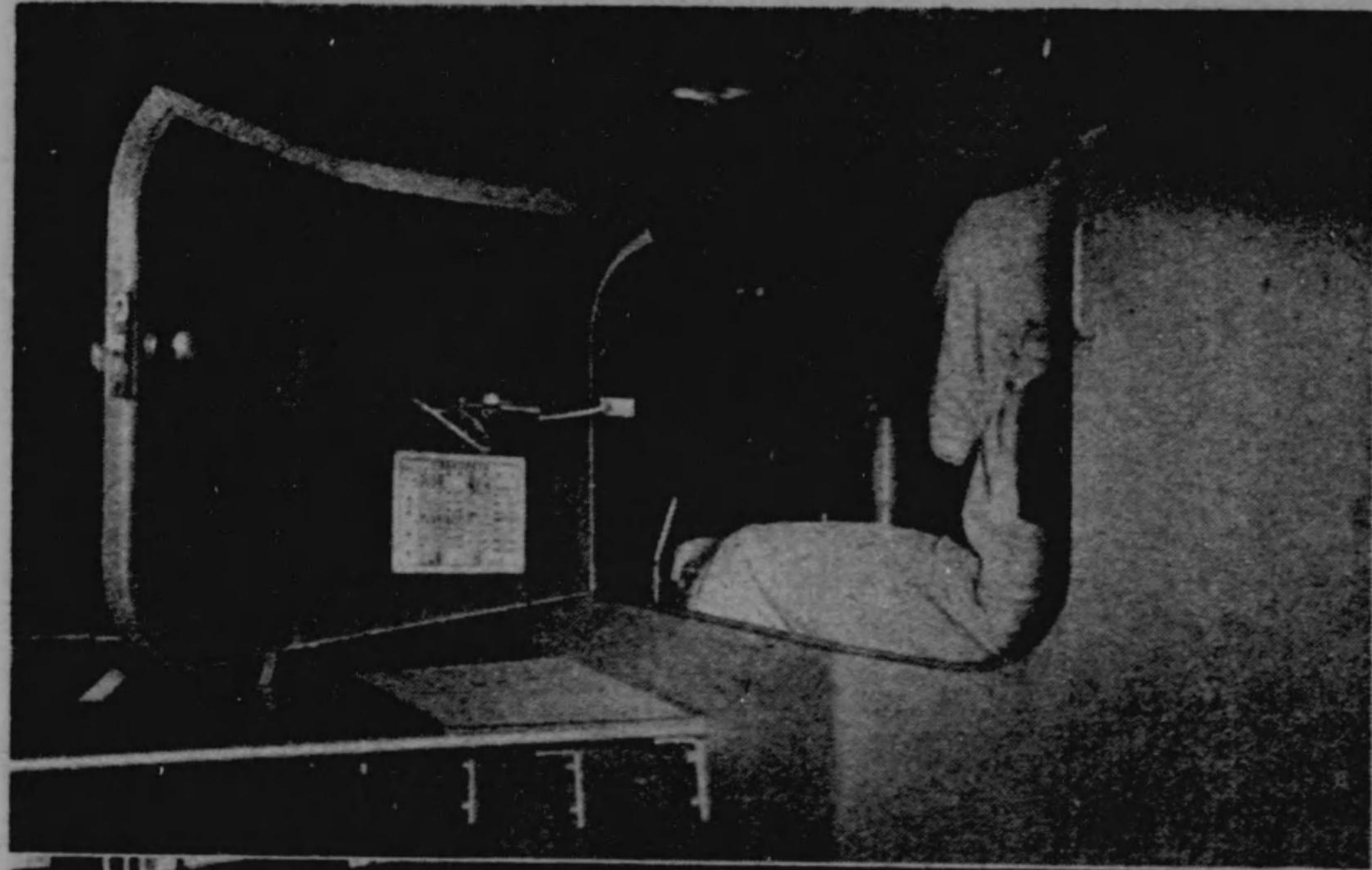
地上練習機

海軍省検閲済乙第 1971 號

この鳩ほつほのやうな飛行機には一通りの計器が備つてをり、座席の覆ひを被せると、所謂盲目飛行の練習も出来る。

むづかしい計器操縦もこのやうな地上練習の訓練から始められる。

海軍省検閲済乙第 1972 號



海軍省検閲済乙第 1973 號

さらば飛行豫科練習部よ

こゝで受けた教育が生活が、快い血潮となつて速しく成長した彼等の肉體をめぐる。今やうやく憧れの空に雄飛するために彼等は操縦に偵察に各々任務に別れて各航空隊に向ふのだ。



卒 業

甲種飛行豫科練習生は一年半、乙種は二年半を通じ、以上のやうな過程を終へると、甲種生は三等飛行兵曹、乙種生は一等飛行兵となつて卒業する。

卒業といつても、普通の學校とちがひ、それで一本立になれるのではない。休みも何もしに、右から左へ、飛行練習生となり、各地の航空隊へ配屬されるのだ。この時、各自の特質やその他の事情によつて、操縦分科と偵察分科へ進路が分れる。

兵舎から正門まで、道の兩側に教官や在隊の練習生が見送りに立つ。卒業退隊の少年達は、四列縦隊をつくり、舉手の禮を續けながら、肅々としてその間を行進する。

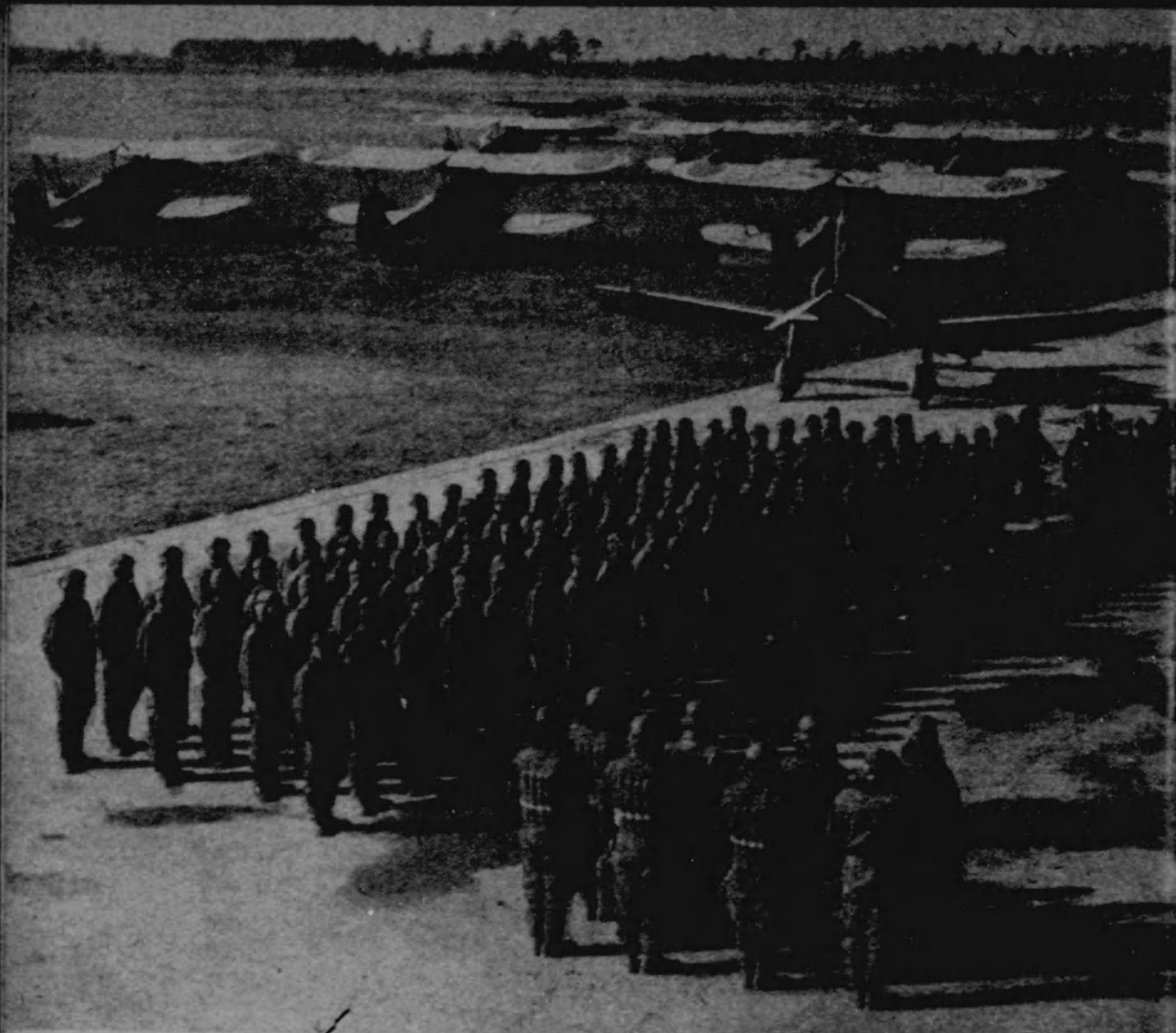
さらば、飛行豫科練習部よ。

送るものも、送られるものも、この時ばかりは感激の涙をおさへることは出来ないのである。

雄 飛 篇



海軍省檢閱演乙第 1974 號



海軍省検閲済乙第 1975 號

航空隊の朝

すでに地上鍛錬を終った元氣一ばいな少年達が、地上練習機の操縦も終つてあこがれの飛行機と格闘してゐる。

「右へならい、直れ、番號」

練習生「1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10……18. 19. 20. 21……」

「敬禮」

實施科目は前日の通り

飛行止めは十時、掛れ。

氣をつけ、敬禮

右ムケ右

左ムケ左

海軍省検閲済乙第 1976 號



あこがれの天空へ

各地の航空隊に配属された少年兵たちは、そこで約一年間、みづちりと實地の教育を受ける。各種の高等飛行をはじめ、射撃、空中寫眞、偵察、通信、爆撃等、およそ飛行兵に必要な、一切の教育と訓練を受けるのである。但し、操縦分科と、偵察分科によつて、内容に相違のあることは、前記した通りである。又、さういふ本格的なものの前に、飛行豫科練習生時代にも、一通りの飛行訓練を受けることも前記した。

始めて空に上る日。

格納庫の前には、黄色にぬられた初歩練習機がすらりと並んでゐる。練習生達は、そこまでトラックで運ばれる。ばらばらとトラックからとび降りて、格納庫前にかげこみ、黒板、机、椅子、落下傘等を持出す。飛行準備である。

それがすむと、地上指揮官の前に整列して敬禮する。

「本日より飛行を始める、まづ、水平上昇、水平降下の直線飛行。」

指揮官の少佐のおちついた聲。

「〇〇練習生、××號機、空中操作同乗出發します。」

練習生の張切つた聲。黒板の前に駈けより、そこにかけてある自分の乗る飛行機の番號と名前を書いた札を裏がへし、搭乗機へかけつける。機上には、すでに擔任の教員が待つてゐるのである。

座席につくと、バンドで體をしばりつけ、落下傘の自動曳索を機體の張線に結びつけ、傳聲管をつなぐ。バンドでしばるのは、體が



海軍省檢閲済乙第 1977 號

搭乗割當が發表

自分の乗る飛行機の番號が發表される。
地上勤務員がそれを控へる。
無限に見える大空も狭い、各航空隊の飛行範圍が決つてゐる。



同乗飛行

海軍省検閲済乙類 1978 號

放り出されないため、自動曳索を結びつけるのは、万一の場合とび降りた時、落下する體の重みで、開傘用の索が、自動的にひらかれるやうにするためである。

準備がととのつたら、いよいよ出發、離陸である。

教員席の操縦装置と、練習席の操縦装置は、すべて連絡されている。いはゆる二重操縦装置である。それで、練習席の装置に、手なり、足なりを軽くあてておくと、それがどういふふうに動けば、どういふふうに飛行機に作用するか、といふことが體得されるわけである。

始めて空中に浮いた時の感激はいひやうもない。どんなにおちつ

傳聲管

傳聲管は、教員と同乗者の口と耳とをたがひに連ねて互ひの聲が直接通じるやうにするものである。かうしないと風や爆音のためにきゝとれない。



かうとしても、胸はわくわくする。卵をにぎるやうに、柔くにぎつておなければならない筈の操縦桿に、思はず力を入れる。それはすぐ教員の方にひびく。そして「力を入れるな。」と叱られたりする。

教員から、懇切丁寧に操縦法を教へられた後で、しばらくの間、練習生は自分の搭乗機を任せられる。機はなかなか以ていふことをきいてくれない。その度に教員は、機首が上り過ぎるとか、右に傾いたとか、目標を見失つてゐるとか注意してくれる。

一通りの練習をすまして着陸する。これは勿論教員がやる。機から降りると、耳がジーンと鳴り、頭がぼーつとする。何だか馬鹿に



海軍省検閲済乙第 1979 號

なつたみたいだ。それでも、元氣を出して、指揮官の許へ駆けつけ報告する。

「〇〇練習生、××號空中操作同乗歸りました。」

今降りた機には、次々に仲間が乗せられては飛上つて行く。

操縦教育

教員 「ようするに飛行機がかう下つてゆく感じ、これを飛行機の沈みと云ふが、之が早く判る様にならなければいけない、それから佐藤練習生はいつも着陸前に速力が少ない。」

練習生 「はい」

教員 「中村練習生は誘導コースの廻り方が、大きいな」

練習生 「はい」



今日から單獨
飛行が許可さ
れた。
見上げる親鷲
の教員と戦友
たち。



あこがれの單獨飛行

海軍省検閲済乙第 1980 號

教員 「今日は大體狀況がいゝようだから、今度はひとりていつてこい」

練習生 「はい」

ひとりて行つてこい、これこそ待ちに待つた單獨飛行である。數々の
勞苦も努力もこのことのためだつた。

はじめて、生れてはじめてあこがれの空の一點をたゞひとりて飛ぶと
きの喜び、實際誰もが聲をあげ自から調子をとつてひとり歌つてみる
さうだ。

地上指揮官報告を受ける



70



練習生 「中村練習生 64 號離着陸單獨飛行歸りました。」

教官 「うん」 なかなかうまかつたぞとは心の中では思つても口では決してほめてくれぬ。

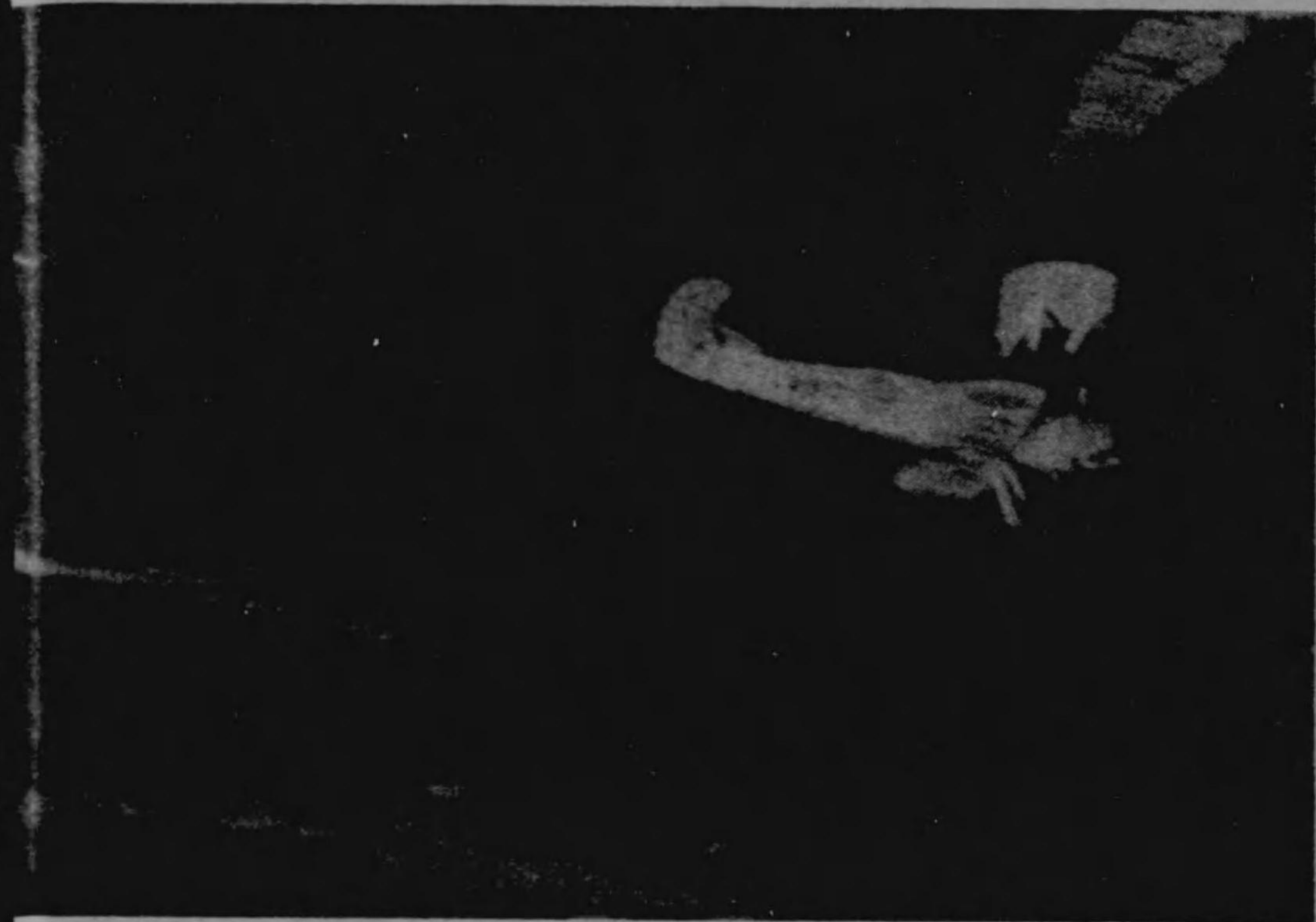
71

特殊飛行

特殊飛行——高等飛行は、豫科練習生時代に、教員の操縦によつて、一通りの體驗だけはあたへられる。

特殊飛行は、昔は曲藝飛行家が、見物をうならせるために行ふものであつた。しかし、この前の歐洲大戰以來、空中戦には絶體不可欠の操縦技術となつたのである。

これには、宙返り、木の葉落し、逆轉、横轉、錐もみ、垂直旋廻横滑り、等々、いろいろある。しかし、一言でいへば、飛行機をどんな状態においても、自由にあやつれる技術といふことになる。



空中戦では、より敏捷に身をこなし得るものの方が有利であることはいふまでもない。上下左右にしか飛べないのでは、どんなに性能がよくても、武装がまさつてゐても意味をなさない。一方が、その特技を利用して、忽ち、自分は攻撃され難く、敵を改撃し易い位置へ、くひ下つてしまふからである。

例へば、單座戦闘機でいへば、その火器はすべて前に向つて固定されてゐる。従つて、敵の後、特に後上方に位すると、自分は絶対に射たれずに、自分だけが最も射ちよい、ねらひよい態勢となる。そこで、敵を見たら、出来るだけこの有利な位置を占めようとする。又、敵にさういふ位置を占められたら、一刻も早く、その敵をふり



特殊飛行に於ける操縦者の表情

放さなければならぬ。さういふ位置を占めるにも、ふり放すにも、必ず要求されるのはこの特殊飛行なのである。

尤も、支那の飛行機などは、木の葉落しや錐もみなどをやつて、いかにも墜落するかの如くよそほひ、こちらの攻撃のゆるんだ時を見計らつて、脱兎の如く逃走することが、しばしばあるさうだ。しかし、これも特殊飛行の應用であるにはちがひない。又、特殊飛行は、何かの故障で不自然な飛行状態に陥つた際、それを正常にもどす上にも、非常に役立つのである。

この特殊飛行は、極端に不自然な飛行をやるものであるから、搭乗者の肉體に及ぼす苦痛が甚しい。例へば宙返りの場合は、猛烈な遠心力の作用を受けて、體が座席へ強く押しつけられると同時に、血液も外方——下肢の方へ押されて、腦貧血を起す、急上昇、急降下の場合などは、數分數秒のうちに——今日の戦闘機は富士山の頂



上の高さまで昇るのに、四分を要しない——氣壓のひどく違ふ位置へ移動するので、しばしば鼻血を出したり、失神状態に陥つたりする。

それを克服して、瞬時の間に適確な判断を下し、戦闘目的を成就することが出来るまでにはいかに激烈な訓練をくりかへさなければならぬかは、讀者にも十分想像されよう。

二頁にまたがる連続寫眞はこの劇しい特殊飛行に於ける操縦者の表情を同乗のカメラマンが撮影したものである。



海軍機の種類

こゝでちよつと、海軍機の種類についてのべると、それには、戦闘機、爆撃機、攻撃機、偵察機、飛行艇等の別がある。

戦闘機は、空中戦をその本来の任務とする。従つて、各機種のうち、最も速度と運動性にすぐれてゐる。一人乗——単座で、数挺の機銃が前方へ向けて固定されてゐる。およそ敵機とあれば、各種をえらばずおそひかゝつて撃墜する。敵の戦闘機とて同様である。従つて、味方の爆撃機隊が、敵の戦闘機に襲撃されないやうに、援護する役目にもつく。又、必ずしも敵機ではなく、敵陣なり、敵艦なりに急降下して、これに機銃の掃射をあびせるやうなこともする。

爆撃機は、爆弾をもつて爆撃するのが任務である。二人、乃至三人乗。専門の操縦者の他に、爆撃手や射手が乗込む。自然、體も鈍重となり、戦闘機のやうに輕快には動けない。武装は、前方へ向いた固定機銃の他に、後方席に旋回機銃があり、後方よりの襲撃に備へてゐる。いはゆる急降下撃爆は、この機種の誇とするものだ。

攻撃機は、主として魚雷をもつて敵艦に攻撃を行ふものである。魚雷攻撃は、潜水艦や驅逐艦の最も得意とするところであるが、攻撃機は、その高速を利用し、敵艦の所在を知れば、極めて遠距離の地點へも、短時間のうちに到着するといふ點で、海上艦に優つてゐる。その代り、それ等のやうに、多數の魚雷を續けて發射することは出來ず、一度に一本しか使へない。武装は大體爆撃機に同じく、又爆撃機と同様に、爆弾攻撃をなすことも出来る。

偵察機は、敵艦隊の發見、敵情の偵察、彈着の觀測等の任務につく。従つて、その航續力が大きく、特に高性能の無電機をつんでゐる。二、三人乗、固定、旋回の機銃を備へ、フロートのついた水上機によつてゐるのが普通である。

飛行艇は、大型の艇體に翼のついたものである。従つて波に強い普通の水上機は發着不可能な程度に荒れてゐる海上でも、平然として行動する。又、その滑走場は海上であるから、滑走場の制限を受けずに、その機體を大きくすることが出来る。機體を大きくすることが出来ることは、多くの燃料や、人員や、攻撃物などをつむことが出来ることを意味する。そこで飛行艇は、廣大な海面上に行動して哨戒し、同時に敵の艦船を襲撃する役目につく。

偵察機と飛行艇の他は、海軍機といつても、車輪によつて發着するもので、その點では陸軍機と變りがなく、又、陸軍機と同様に、陸上の飛行場を基地として活躍し得ること、支那事變によつても知られる通りである。

しかし、海軍機本来の面目は、航空母艦を基地として、洋上遠く進出し、その飛行甲板に發着して敵の艦船を襲ふところにある。この母艦を母胎とするものを艦上機といふ。即ち、艦上戦闘機、艦上爆撃機、等、々となる。これに對して、戦艦や巡洋艦等の大型艦に、數機づゝつまれてゐる偵察機は、艦載機と呼ばれ、カタパルトから射出されて飛出し、歸着の際は海上に着水し、デリックで元の艦上へ納められる。

我が海軍には、これ等の他に、陸上攻撃機といふものがある。その任務は艦上攻撃機と變らないが、體驅が巨大で、その行動範圍が

非常に大きい。いわゆる渡洋爆撃機はこれである。體驅に比例して、その滑走距離も長くなるため、陸上の基地によつてでなければ活動されない。陸上攻撃機の名のあるのはそのためである。

海軍機の特殊性

前記したやうに、海軍機の多くは車輪を持ち、陸上機と全く同じ状態において活躍する。しかし、海軍の目指す本来の相手は、敵國の艦隊である。従つて、その航空部隊の本来の立場も、味方の艦隊と協同して海戦に参加し、又、海洋上空で敵機と空中戦を演ずるところにある。

かういふ行動をとるためには、どうしても航空母艦を中心として行動することを、主としなければならない。又、たとへ自國の沿岸に基地をおいたとしても、その活動の舞臺を海洋上に求めなければならない。結局、あらゆる海軍機は、——水上機や飛行艇は勿論、戦闘機にせよ、爆撃機にせよ、攻撃機にせよ常に海洋上空の活動を本来の任務とする點には變りがない。

航空母艦の飛行甲板は、幅二、三〇米、長さ二〇〇米前後である。この上から飛揚する時は、母艦は風上へ向つて高速力で走る。風と艦との合成速度に等しい風壓を受けるために、機は比較的短距離の滑走によつて浮揚するのである。

着艦する時も、艦は風上へ向つて走る。甲板上には、やはり風と艦との合成速度の風が流れてゐるわけである。そこへ、機は艦尾の方から、出来るだけスピードをおとして滑りこむのであるが、その強い向ひ風のために、滑走距離が短縮されるのである。又、甲板上

に綱を張り、機體から鉤を出してひっかけ、滑走を機械的にくいとめる方法もとられてゐる。

かういふやうに、特殊な工夫をこらしてはあるが、それにしても母艦への發着作業は、實に大きな困難と危険を伴ふものである。その度合は、出發よりも歸着の場合に、一層甚だしい。第一、廣大無邊の洋上の一點に、母艦を見出すことそれ自體が難事中の難事である。無電で連絡をとるにしても、山や、川や、道路などの目じるしをたどつて、母艦より数十倍も大きい、陸の飛行場を發見するのは、比較にならない。

それに、海上の天候は非常に變化し易い。毎日のやうに飛びなれたコースでさへ、少し霧の多い時など、立派な無電設備をもつた旅客機が、しばしば航路を失ふことがあることから推しても、母艦への歸着の困難さは、容易に想像されよう。このことは、艦上機ばかりでなく、艦載機の場合でも、陸上に基地を持つ機の場合でも同様であつて、波濤以外に目標の絶無な、即ち、何度とんでも、始めてとぶのに等しい海洋上空を舞臺とする海軍機に共通の苦勞である。

次に着艦である。前に述べたいろいろの方法は、要するに滑走距離を短縮するためのものに過ぎない。それ以外のことは、搭乗員の技術一つにかゝる。甲板の長さも長さだが、幅もやうやく二、三十米である。しかもそれが高速力で走つてゐる。その中心線へすつと車輪をつけることは、不動の大地に發着する陸上機の搭乗員には想像もされないむづかしさである。それで、練習生時代には、定着をいく度となく稽古する。陸の飛行場に、母艦の甲板の幅ぐらゐの間隔において、二本の線を引き、その真中に着陸する方法である。

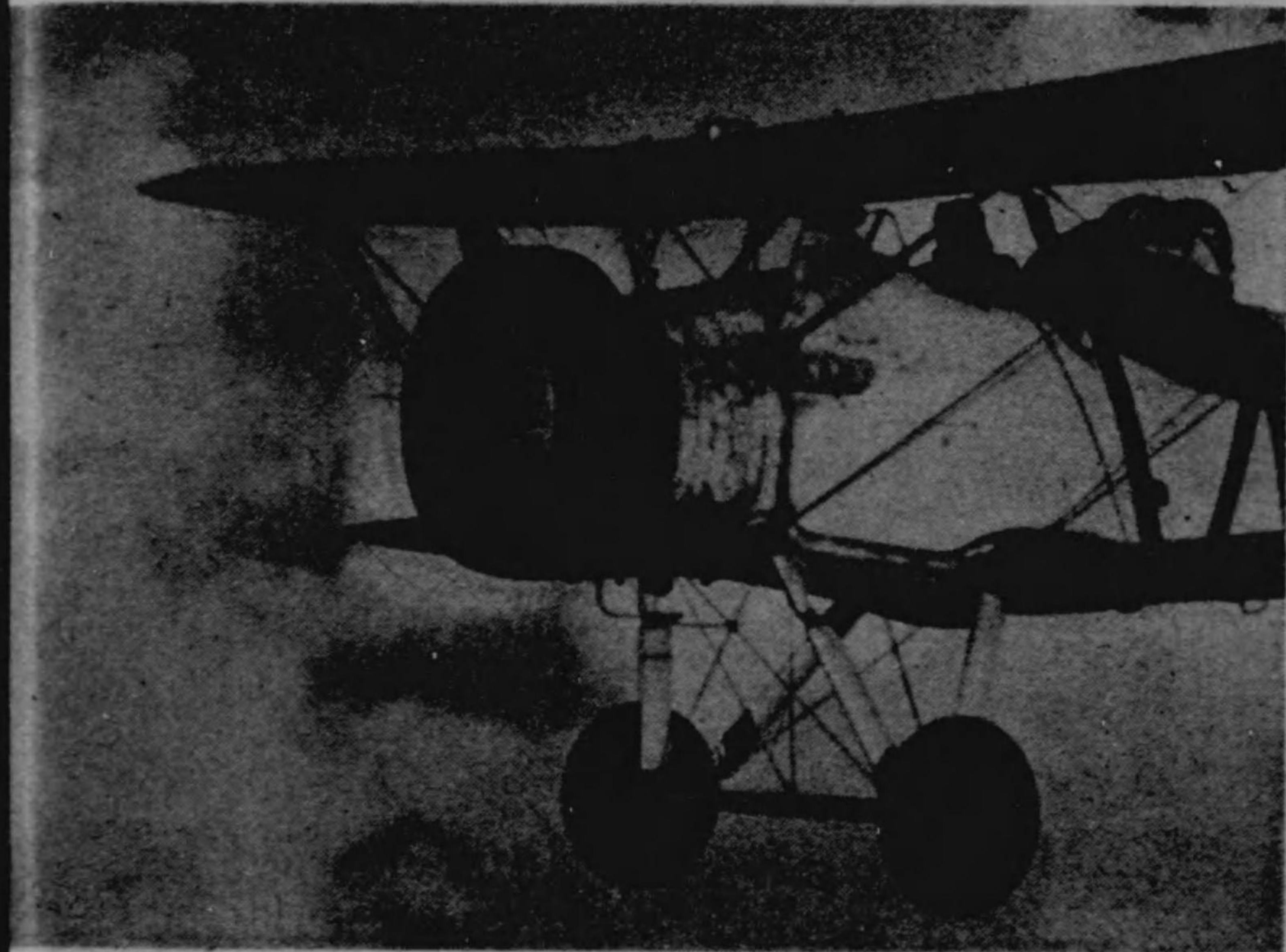
ところが、例へ巧みに甲板の中心へ接觸しようとしても、その瞬間に、母艦が波をくらつて尻を上げれば、甲板へ激突するといふ最も危険な結果を生ずる。このために、各國とも、どれだけ多くの犠牲者を出してゐるか知れないのである。さういふ危険の發生を、瞬間のうちに察知し瞬間のうちに適切な處置をとつて、使命を果し得るまでには、實に血のにじむやうな訓練が續けられるのである。しかも戦時には、母艦は燈火管制をする。燈火を管制して、暗黒の大洋中の一點に、波にゆれながら高速力で走つてゐる母艦、そこを基地として行動する場合を考えると、海軍機の特殊性は、いよいよはつきりして來よう。

定 着 (制限着陸)

海軍省檢閲濟乙第 1983 號



海軍省檢閲濟乙第 1984 號



計器飛行の練習

後の席の覆ひを被つた練習生が操縦してゐる。こうして次第に霧の中、雨の中等の無視界でも飛行することが出来るやうになる。

又、海軍機の攻撃目標は、主として敵の艦船である。それ等は勿論動搖と全速航行を續けてゐる。それを爆撃することの困難さは、陸上の動かない陣地や、建物などを爆撃することの比ではない。その上、船上には、數十門の高角銃砲が、筒先を揃へて上空を狙つてゐる。ロンドンや、ベルリンに、幾百幾千の對空火器が集中してゐるといつても、それは廣大な都市全體に分散されてゐるのである。しかし、軍艦の場合は、一艦ごとに幾十門づゝかたまつてゐるので

ある。(イギリスの新戦艦キング・ジョージ五世には、機銃だけで一二〇門ある。) 急降下する爆撃機も、艦上掃射を試みる戦闘機もその弾幕の中に身を挺して敢行するのである。

魚雷攻撃を行ふ攻撃機も、潜水艦のやうに、體をかくすわけには行かない。又、やり直しがきかないから、是非とも一發必中を期さなければならない。全身を敵前に暴露して、肉迫發射するのである。

艦載の偵察機は、カタパルトから射出されて飛揚する。しかし、いよいよ海戦となれば、自艦は全速度で行動してゐるから、その側に着水して釣上げてもらふなどのことは、てんから望めない。それで、海戦時の艦載機は、原則上、飛出したら最期、生還し得ないものとなつてゐる。平時でも、母艦の艦上機などは、前記したやうな諸事情から、常に生き別れの覺悟で飛出して行くのである。

實に、海軍の航空部隊こそは、平時でも戦時と何の相違もなく、最高度の危険と困難を克服し、最も激烈な訓練に従つてゐるものである。そして、さうしなければ、海洋といふ特殊な條件を持つものの上の制空を確保することが出来ないのである。

實戦に参加した、少年飛行兵出身者は、異口同音にいふ、——第一回目、飛出したばかりの時は、流石に固くなります。しかし、すぐ慣れてしまひます。そして、全くふだん教へられ、ふだん稽古してゐる通りにやれば、それでよいのでした。空中戦とはこんなものかと、あつけなく思はれるぐらゐでした。

以つて、日常の訓練の眞剣さ、激烈さが想像されよう。

整備作業

海軍省検閲済乙第 1985 號







航 法

教官 「航法と云ふものは地味であるが、苟くも飛行機が行動す以上は絶対必要な仕事である。

特に頼るべき何物もない洋上を數百マイルとんで敵を攻撃し又母艦に歸ることは正確な航法の實施がなくては出来ないことだ。

これが遠距離になればなる程その間天候の變化もあることであり、又暗夜の洋上にてもなれば益々むづかしくなる、お前たちもその積りでしつかりやれ。」

「はい」

教 室 に て

教官 「宮澤練習生」

練習生 「はい」

教官 「往航第一航路の針路距離」

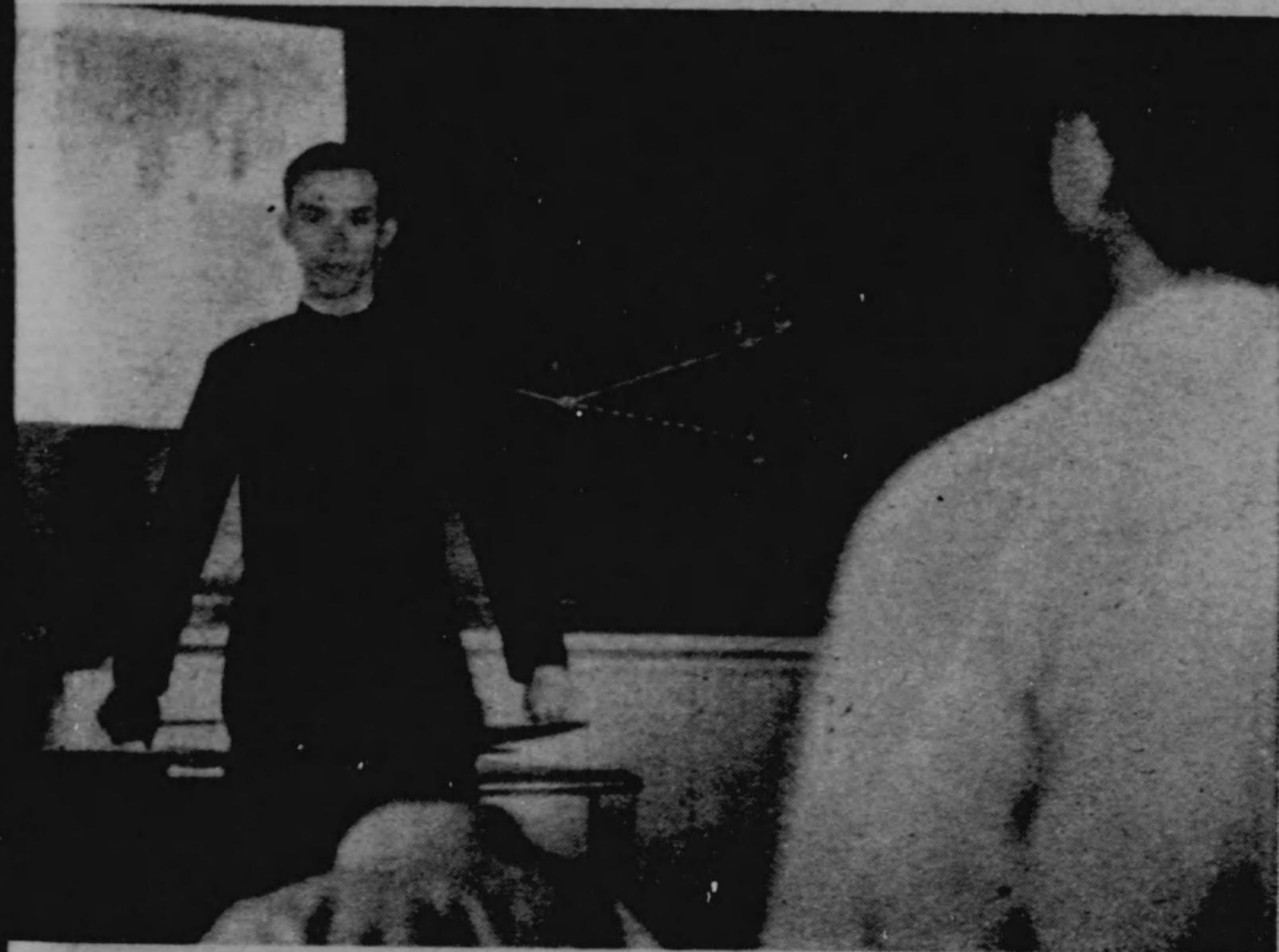
練習生 「213 度 33 哩半であります」

教官 「小西練習生」

練習生 「はい」

教官 「箱根を越す場合の飛行高度、自分の腹案を云つてみろ」

練習生 「山は千米でありますから四百米の餘裕をとり千四百米で飛びます」



機上作業

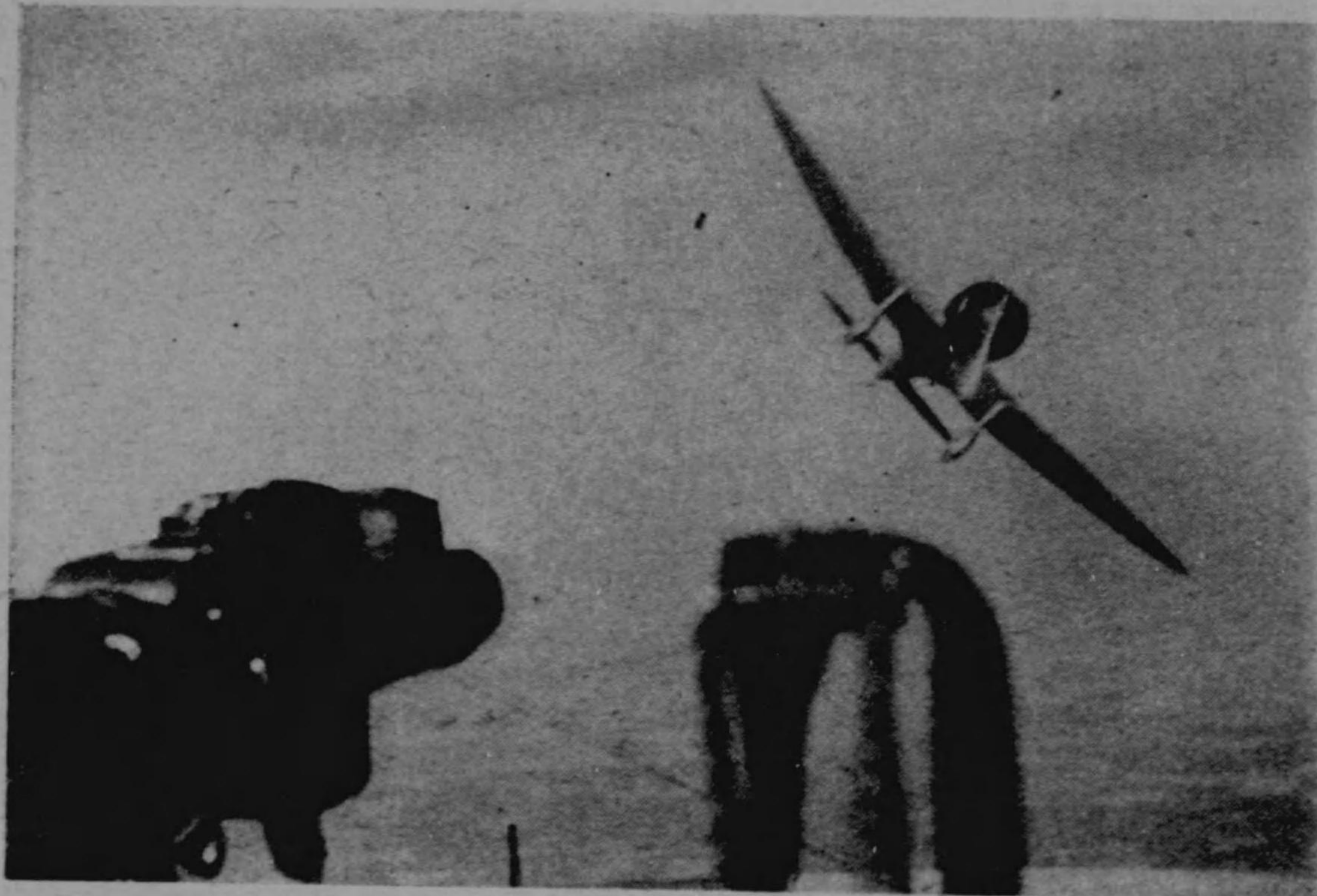
機上作業練習機で射撃，偵察等各種の練習が行はれる。
射撃は他の飛行機の曳行する吹流しを標的として行はれる。

海軍省検閲済乙第 1988 號



海軍省検閲済乙第 1989 號

或は平航し，或は反航する吹流しを狙ふ射手の心には，やがてわが手に撃墜される敵機の姿が描かれてゐるだらう。



海軍省検閲済乙第 1990 號

寫眞銃射撃

吹流しの射撃練習が終ると上下左右から襲ひかかる戦闘機を相手に立體的の射撃訓練が始まるこれには寫眞銃が用ひられ、引金を引けば弾丸

がとび出す代りに、中のフィルムに弾着成績が現はれるのである。

海軍省検閲済乙第 1991 號





卒業飛行

海軍省検閲済乙第 1992 號

彼等は勇躍出發する。
將來の作戰行動の飛行は必ずこのやうな飛行機隊の移動に始まるのである。そして地形と氣象の障礙を突破し、敵戦闘機の妨害を防ぎ、砲火を冒して任務を達成しなければならない。今日はその最初の手習ひである。

司令 「本日の卒業飛行は實に美事であつた六ヶ月前何も知らなかつたお前達がこんなに立派な腕前となつたのを見て涙の出る程うれしい。これから皆實施部隊にゆき海の荒鷲の一員として大陸に、又は海上に活躍するのも遠くはない。ラジオや新聞に、お前達の手柄話が一日も早く聞ける様、我々教官、教員はクビを長くし待つてゐる。」



海軍省検閲済乙第 1993 號

海洋航空の重要性

日本の国土は、南北數千料にわたつて、海洋上に散在してゐる。これを襲ふには、艦隊をもつてしなければならない。即ち、海國日本を狙ふ敵は、その攻撃路を海上にえらぶ。同時に、その空軍も亦その攻撃路を海洋上空におく。昔は、海國を守るには、艦隊だけで足りた。しかし今日は、双方の海軍航空部隊が、偵察に、爆撃に、又それを阻止し合ふために空中戦を演ずる。この空中戦の敗者は、必ず艦隊戦の敗者となる。即ち、海戦の勝敗を決するものは、その事前における空中戦だ。

或場合には、強力な空軍が、單獨で艦隊を敗退させることもある。クレータ島に集結してゐるイギリス艦隊が、ドイツ空軍の猛襲のために追出されたのは、その一例である。

又、今次勃發した日米英戦の劈頭、猛然ハワイ真珠灣を奇襲して多數の戦艦、その他を屠り、又マレー沖海戦では不沈軍艦と誇つたプリンス・オブ・ウェルス號及びレパルスを撃沈して、世界を震撼させたわが海軍の偉力こそ、絶好の實例であらう。

四二〇〇〇噸のイギリス巡洋戦艦フッドを、一撃の下に屠つて名を擧げたドイツ戦艦ビスマルクは、イギリスの艦上機によつて、返り討ちにあふ機会を捉へられた。あの時、ドイツ側にも航空母艦があつたら、勝敗の様子は、ずつと趣を變へてゐたであらう。

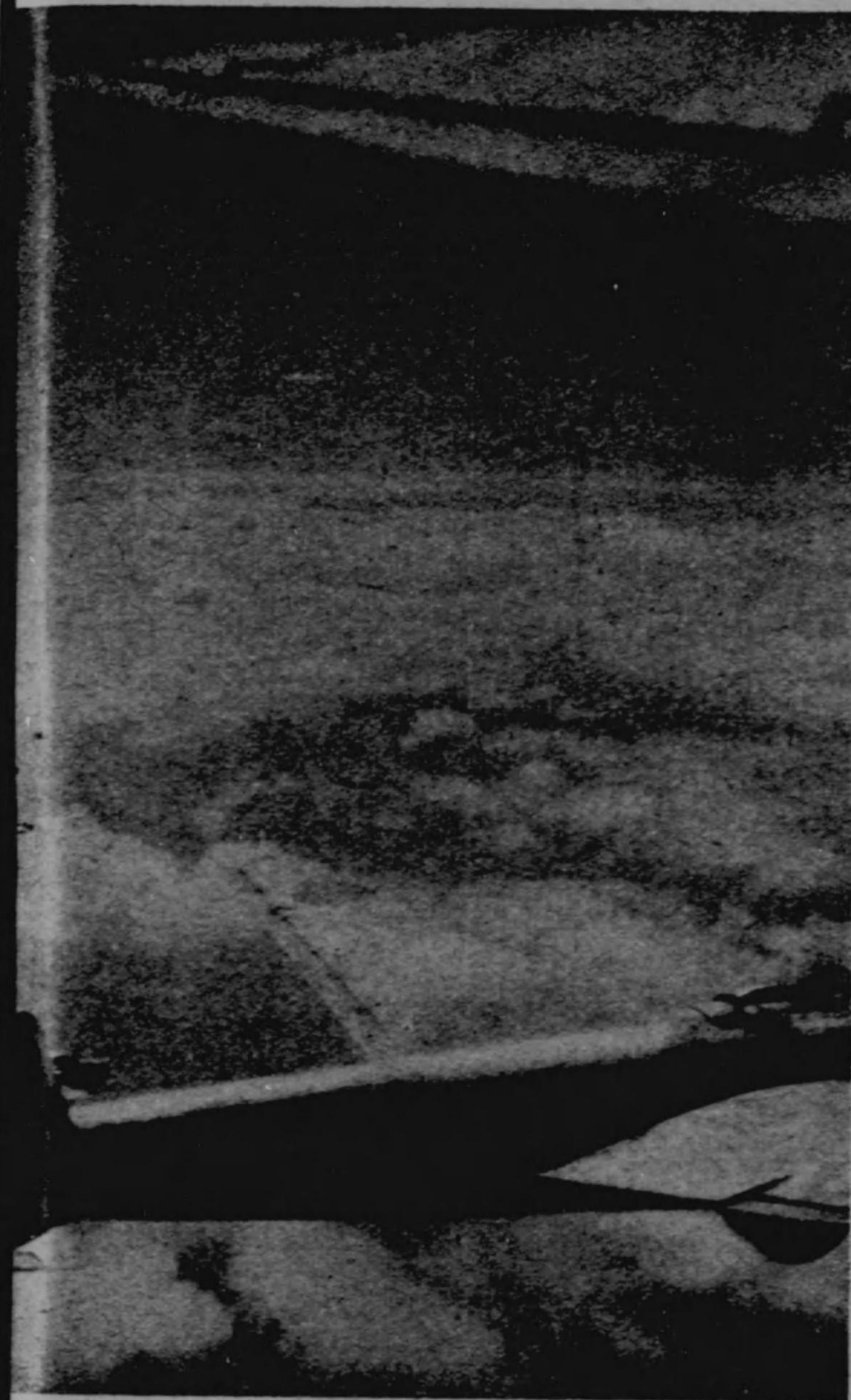
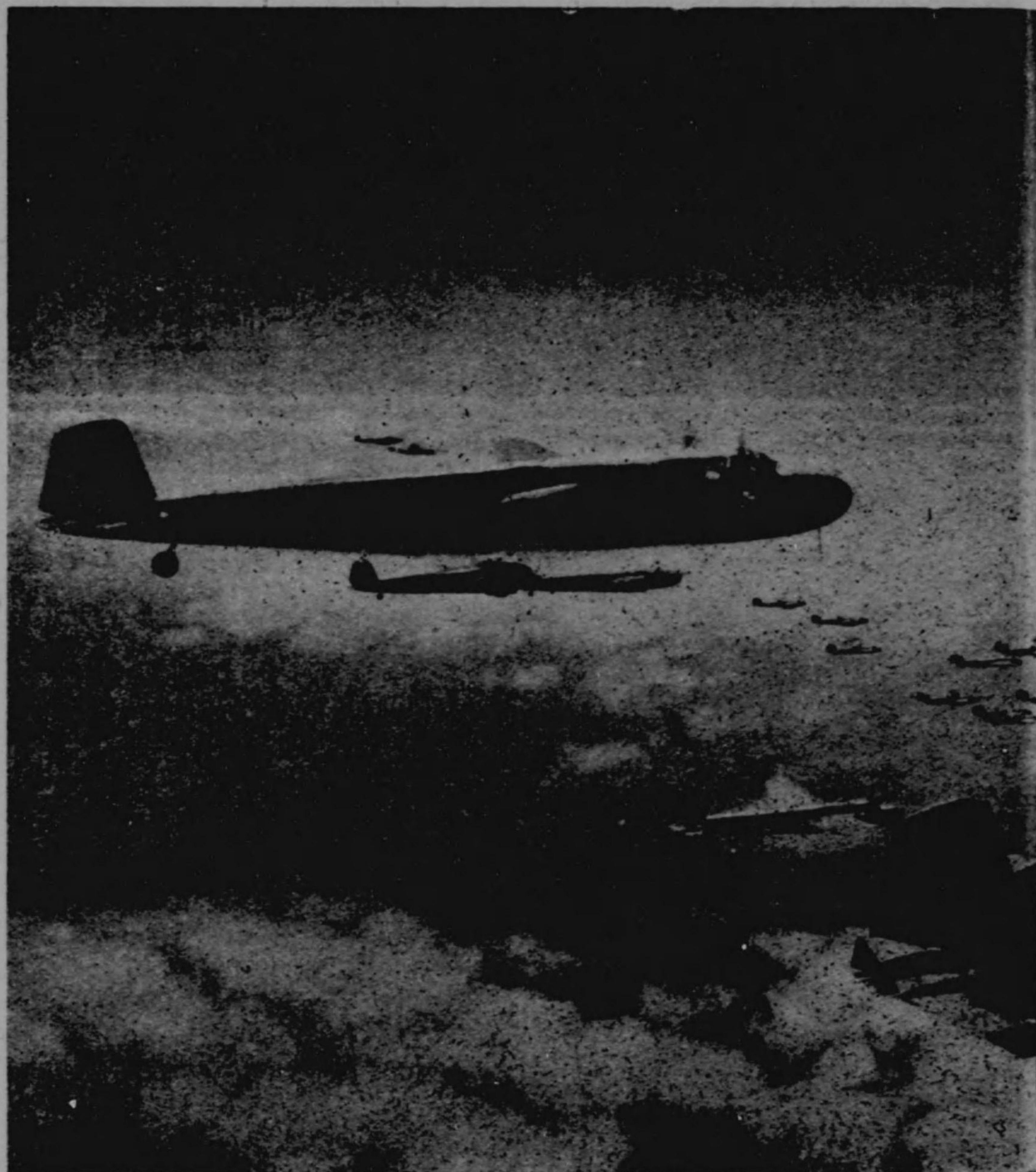
ビスマルクの無電を受けて、救援に赴いた二〇〇臺のドイツ爆撃機が、一弾も投じないで引返さざるを得なかつたのは、天候不良の

故もあつたが、むしろドイツの空軍が、海洋航空に慣れてゐなかつたためであるといはれてゐる。

海國日本を守るもの、それは優秀な艦隊と優秀な海洋航空部隊であることは、このやうに明らかだ。

優秀な海洋航空部隊は、優秀な航空機を以つて編制されなければならない。それと同時に、否、より以上に、優秀な航空將兵の充實が必要だ。航空將兵の優秀さは、單に技術の上下のみではきめられない。沈着、大膽、明敏、果斷、不撓不屈の氣力、斃れて後もやまぬ航空精神、豫科練習生時代の、いはゆるタックル、突込み、がんばり等々の精神を持つたものでなければならない。

即ち、まづ「人」が第一である。「空の少年兵」たちが、霞ヶ浦湖畔で授けられる知識や、技術は、もとより貴重なものである。しかし、こゝで受ける、一個の優秀な海軍軍人、一個の優秀な日本人となるための鍛錬こそは、更に貴いものだ。隊出身者が、僅か二十一、二歳の若齡にして、いはゆる渡洋爆撃を始め、幾多の實戦に参加し、常に抜群の手柄を樹ててゐるのを見れば、そこには「技」を越えた「人」の偉大さが見出され、今更の如く、「空の少年兵」の訓育方針に頭が下るのである。



昆明へ、重慶へ
堂々空を駆する
爆撃行



据えつけた撮影機

海軍省検閲済
乙第一九九七號

「空の少年兵」映畫の撮影について

藝術映畫社 村山英治

この映畫は、昭和十五年度から十六年度にかけて製作された文化映畫では、最も成功した作品である。（製作は十五年下半期、発表は十六年上半期）

どういふところが受けたかといふと、この映畫からうける「逞しさ」「迫力」撮影者の「必死の精神」であつて、さらにそれが「美感」や「好ましい感覺」にまで昇華してゐたからである。

それは、一つには、撮影の對象となつた、わが海軍少年飛行兵の教育そのものゝ、逞しさ、美しさであつた。

私どもは、映畫製作のために現地を訪れて、先づそのことを感じた。

禪一つの豫科練習生が、一團となつて、庭で、獨特の體操をしてゐた。均整のとれた肢體が美しくして、まったく若鮎のやうだつ

た。そのとき、私どもは、彼らの體重が十七貫とか十八貫平均だと云はれて、眼を見張つたのだつた。それほど、逞しさと、美しさとが、渾然としてゐるのである。これは、飛行機に乗るやうになつた飛行練習生にも見られた。神経が鋭敏で、繊細で、それでゐて親切で、おまけに勇敢な——さうした完成されたパイロットの印象に近づきながら、しかも若い彼らは豪快であつた。

しかし、こうした鍛錬生活の中へ激しくカメラを切り込んで行つた、井上莞の氣魄こそ、この映畫にとつては生みの親であると云へる。

カメラをもつて對象にぶつかるといつても、さう單純なものではない。相手が秩序立つて息つく間もないだけに、外部から飛びこんで撮影する場合、様々な制約がある。思ひがけない困難も起きる。彼は、それを撮影班の他の人びとと共に克服して、毎朝二時、四時に起き、軍隊式に規律正しく生活し、一方に軍人の信用と便宜とを獲得していつた。

こうした態度が、一貫して寫眞に滲みでてゐる。

用意も周到で、空中撮影は初めてなので、經驗のある宮島義男氏に聞きに行つて、その經驗を攝受してゐる。——たとへば、マガジンをしつかり縛りつけることや、フィルターをレンズの中に入れること。地上設計を慎重にやること。地上でフォーカス、絞りをきめて、テープでとめて置くことなど。

次に、撮影上の飛行機を三臺貸して貰つた。一臺は二人乗りの練習機で、練習生の乗る前部座席へカメラを据えつけるやうに仕組んで貰ひ、もう一臺は五人乗りの中型練習機で、これは右の胴腹に窓

をあけてカメラを据えることとし、他の一臺は大型機銃練習機で、後部の機銃座へカメラを据えた。カメラの位置は、専門家と打合せて、出来るだけ風壓の少い所を選んだのである。

この三臺を交互に使用した。カメラは殆どパルヴオで、たとへばアイモも特殊飛行の時使つてみたら、空気壓搾で全然廻らなかつた。

全く物凄い風壓である。時には、體を乗出して撮影しなければならぬから、鼻がまがり、頬がもげて飛びさうな風速だ。空中撮影では、技術的能力は地上での二〇パーセント位に減退してしまふ。この場合、何よりも大事なものは、精神力である。

また、精神力、態度を語ることに落ちたが、それに引きづられてこの映畫のよさはその誕生を見たのである。

始め、小手調べの特殊飛行に同乗して、續けさまに宙返りや急横轉を十數回やられて、人心地もなく、まだぐらぐら廻るやうな宿屋の天井を睨みながら、彼は倒れて後やむの決意を固めたといふ。

空中撮影の實況



海軍省檢閲濟乙第一九九八號

途中、一べん歸京した折に、彼は自分の部屋を片づけた。實際、前後再三度、死の危険の隣をすり抜けたのだつた。

雲中飛行撮影のときである。並んで行つた相手機が、雲の中で見えなくなり、仕方がないので、こつちはひとり雲の上に出てしまつた。降りたら雲の中でぶつかりさうで危くて降りられない。しばらくうろろうろしてゐたが、思ひきつて降りやうといふことになり、一気に雲を駆け抜けたが、完全に肝を冷したのだつた。

こんなこともあつた。馴れたパイロットだと、鋭く、急角度に宙返りするので、手を離しても落ちない。では宙返りは落ちないものだとばかり手を離して撮影してゐたら、次の新米さんが大きく鈍角に廻つたので、ゴンと翼で頭をついてしまつた。これが複葉でなかつたら、千キロ下の下界で頭を粉ミジンにしたに相違ないのである。

困難と同時に、可笑しなこともあるものだ。一度機上でレンズの入換へをやつたが、これが大變な難作業で、レンズの箱を持つた助手が、眼と鼻のところにあるのだが、何を云つても箱を放さない。聞えないのである。仕方がないから、頭をぶん殴つたら、やつと放した。ところが、レンズを出して、カメラへ向つて延ばす自分の手が一向に進まないのである。も一人の助手はと見ると、風壓で隅へ押付けられて尻モチをついてもがいてゐる！

急降下などでは、鼻の中へ五寸釘をぶち込まれたやう、耳はチーンとして全々聞えない。殊に上昇に移る際は、貧血状態に陥り、眼がもはや見えなくなり、凡ゆる臓器が壓迫される。カメラマンはこのやうな状態で、無我無中でモーターのスイッチを押すことによつて、このやうな状態の飛行兵の表情も記録し得たのである。—終—

寫真と文

寫真・空の少年兵

版權

所有

昭和十七年一月八日印刷
昭和十七年一月十五日發行
昭和十七年五月五日再版發行
(再版第一刷三千部)

昭和十七年十一月二十日增補第三刷發行
(二千部)

定價一圓

藝術映畫社

著者 村山英治

發行人 鈴木八郎
東京市京橋區横町1ノ1

印刷者 渡邊正雄
東京市京橋區西八丁堀四ノ八

印刷所 昭文社印刷所
東京市京橋區西八丁堀四ノ八

發行所 東亞書林

東京市京橋區横町1ノ1
振替東京一七三二九四番

(日本出版文化協會會員番號 120141 番)

配給元

日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

寫真と文 近刊 [空の少年兵] 姉妹編

海鷲 — 前進基地 —

藝術映畫社 村山英治編

巢立ちした空の少年飛行兵が大陸前線に出動して赫々たる戦果を挙げつゝある前進基地に於ける海鷲の生活・整備の勞苦・重慶への爆撃行について海軍省指導の下に撮影した現地記録寫真と解説。

六月下旬發行・B6判・寫真百餘箇・價1圓30送10

題字 海軍大將 有馬良橘閣下
陸軍大將 畑俊六閣下

兵站戰記

朝原吾郎著

大陸兵站戰線の姿、こゝにも偉大なる戦の一面がある。涙と笑のうちに著者の烈々たる愛國の至情の迷る體驗戰記。

四六版 272 頁・寫真 44 葉・著者スケッチ 11 葉・
價1圓30錢送10

寫眞と文 好評重版

蘭印探訪記

大毎・東日映畫部編

大毎・東日特派員が當時戒嚴令下の蘭印に難困な撮影條件を克服して、蘭印東印度の風俗藝術・産業等の實狀を紹介した文化映畫で、南方共榮圏への國民的關心を高めるものとして文部大臣賞映畫の選獎を得た。

B6判・96頁總アート・價1圓 送10

寫眞と文 新刊

干潟の生物

下村兼史著

文部大臣賞文化映畫「或日の干潟」の寫眞に更に豊富な寫眞資料を補足して綴られた干潟の生物詩である。

B6判・總アート104頁・價1圓30 送10

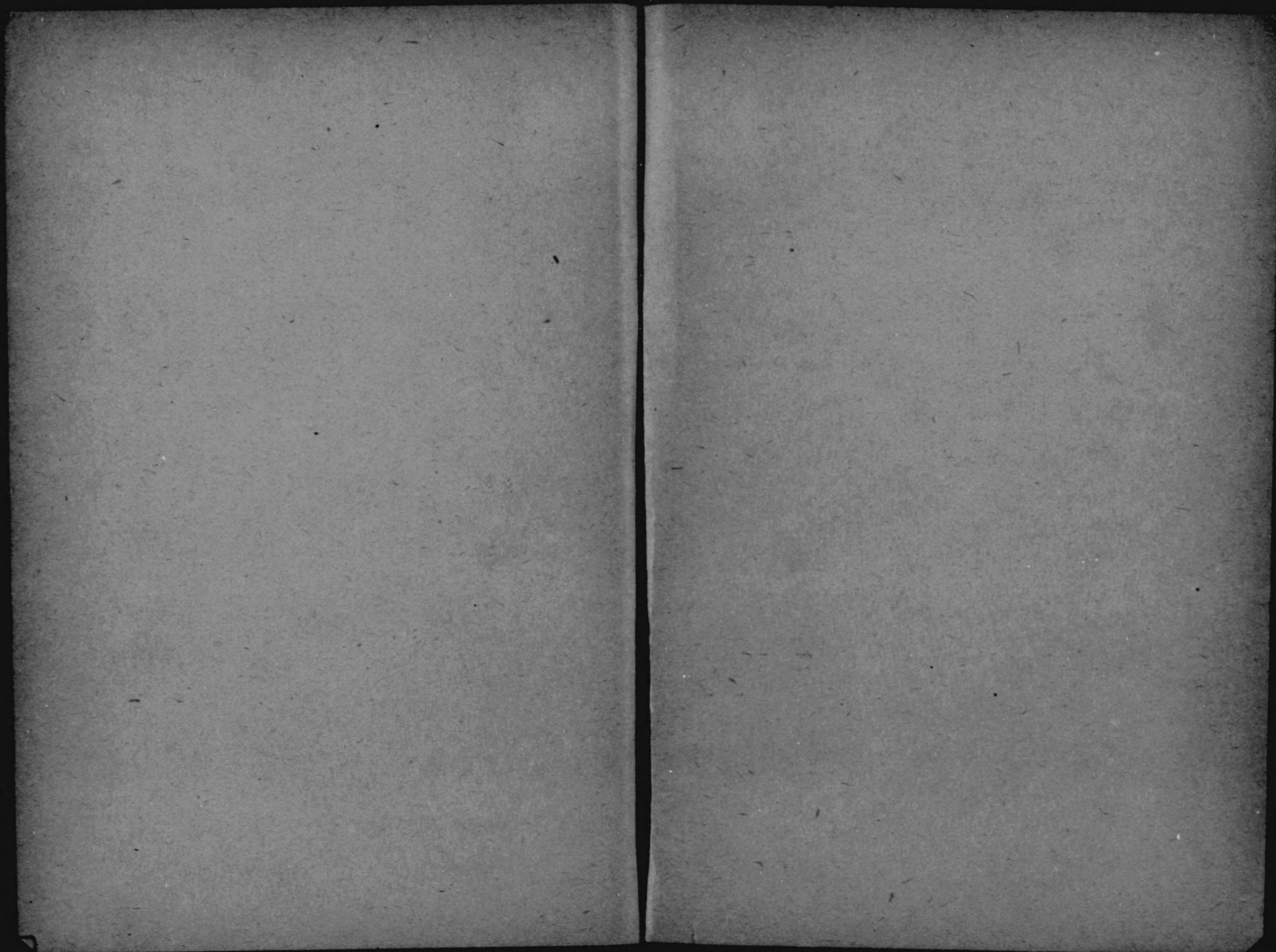
寫眞と文 好評重版

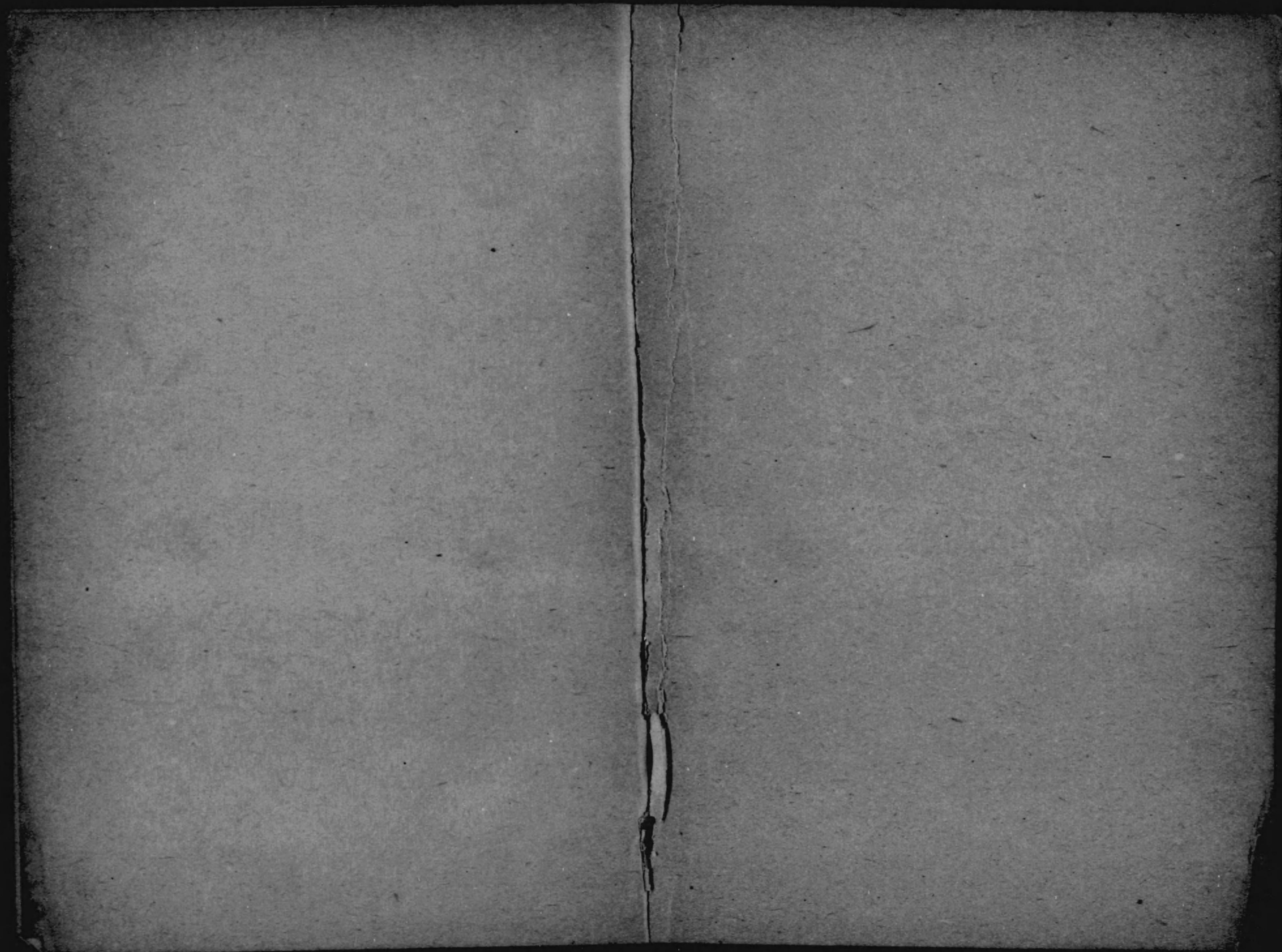
雪と闘ふ人々

塚本 閎 治著

本書は雪と闘ひつゝある人々の生活と、雪害を轉じて人類の厚生に利せんとする科學者の努力とを著者一流のカメラと文章とを以て遺憾なく描く。

B6判・104頁・寫眞百餘箇・價1圓 送10





特 222

95



海軍省檢閱機乙第 1980 號

東亞書林刊